

資料紹介

『出雲国意宇郡宍道郷佐雑村 大森神社 村社雑社旧撰末社 棟簡雑記』

——八東郡宍道町「女夫岩遺跡」にふれつつ——

服部

あそけ

『出雲国風土記』意宇郡宍道郷の「所造天下大神命之追給猪像」の石と「追猪犬像」の石とが、現在の八東郡宍道町大字白石「石ノ宮神社」境内に現存する3石であることを、拙稿『出雲国風土記』の数量表現の信憑性、ならびに数量表現をめぐる編纂過程の一考察——意宇郡宍道郷所造天下大神命の猪像石・犬像石の同定を手がかりとして——（島根県古代文化センター『古代文化研究』第2号、昭和33年3月、松江）（以下『旧稿』）で論証した。その際、宍道町大字白石字宍岩（字女夫岩の北東の隣接地）に存在する女夫岩（私も通称の「夫婦岩」ではなく、字名による「女夫岩」の字を用いることにする）が『風土記』の猪石に該当するとする「伝説」がかつて存在したことを紹介し、この「伝説」が宍道町大字佐々布字大森の大森神社を大正時代まで管掌していた神職の宍道氏によって江戸時代末に提唱され（提唱者は「48世」池田石見重旨の可能性が大きい）、以後大正時代の最後の神職宍道峰清に至るまで喧伝されたことを明らかにした（『旧稿』69頁～73頁）。「旧稿」で述べた如く、この「伝説」は『宍道町誌』で否定されて以来影をひそめてしまった。しかし、この地が高速道路の用地に掛かる可能性が出て来たことを機に、平成8年に少しく息を吹き返した感がある。

私の考えるところでは、女夫岩は『風土記』猪石であることが否定されても、その学術的な価値を失なうものではない。特に私の「旧稿」の論述の方法の上では、石ノ宮神社の3石と女夫岩とは「コインの表裏」と言うべき、マイナスがあつてプラスが存在するという、正負一体の関係にあるから、女夫岩の存在自体が、石ノ宮神社の3石が『風土記』の猪石・犬石であることを一層保証することになる。しかし、学問的論述上の問題に止まらず、女夫岩そのものの重要性についても私は「旧稿」において既に次のように述べた。

夫婦岩が猪石でないことが明らかになったとしても、その文化的価値が無いとは言えないと思う。『風土記』宍道社は夫婦岩に比定できないと考える（拙稿第一章注10/J論文および本論文第十六章）が、しかし、それは夫婦岩の風土記時代および風土記時代以前の祭祀石の可能性までも否定するものではない。夫婦岩は人家から最も遠い、日常の穢れから離れた、谷の行き止まりの頂上附近にそそり立っている。これは良い立地条件であると思う。現地調査の際、稲田信氏が、「ここは銅鐸が出土してもおかしくない雰囲気のところですね。」と感想を漏らされた（平成元々⁸⁹年8月23日）のも、各地の遺跡を見た経験に基いている。

第三章で紹介した如く、夫婦岩は猪石に附会される以前の『抄』の時代には既に「女男岩」として知られており、『考』の時代には「夫婦むつまじからぬもの」指つれば（中略）必其証しあるとそ」と信仰の対象となっていた。また、前章冒頭（61頁上段）に述べたように、裏付けをまだ得ていないが、雨乞いの対象にもな

っていたという。立地の上からも立石に見える形態の上からも、また近い時代まで信仰の対象とされていたことから、祭祀石の可能性は残されていると思う。その意味から、地元の方々には今後、遺物の出土には注意を払って頂きたいものである。(68頁、69頁) (傍点原論文になし：服部)

ゴシックは本引用に際し改めたものである。執筆当時女夫岩の存在価値は右に尽きていると思っていたが、その考えは今でも変わらない。果して、島根県教育委員会・宍道町教育委員会の平成8年7月の発掘調査によって、女夫岩下方「平坦地直下の丘陵斜面から古墳時代中期後期の土師器、須恵器片が出土し、さらに周辺の丘陵斜面に広がる遺物包含層から土師器、須恵器片多数が出土し」、「巨岩を信仰とする祭祀遺跡であって、時期は少なくとも古墳時代中期までさかのぼり得る」ことが明らかとなった。さらに「巨岩下方(西方)の石垣と削平された平坦地」も出現し、これは「中・近世近代に再整備された神社跡の可能性がある」こととなった(島根県教育委員会作成資料「女夫岩遺跡・石宮神社境内」)。

石ノ宮神社宮司古瀬美明氏は、

「この岩(女夫岩：服部)の窪みに溜った水を替えると雨が降る、としてかつて雨乞いの対象にした」という言い伝えを聞いておられる(昭和62(1987)年7月25日)。「風土記」榑縫郡神名榑山の雨乞いの石神に似た習俗が近い時代にもあったのか、と非常に興味深く思った(後略、服部)。(旧稿「61頁」)

『肥前国風土記』にも「此の二つの石に就きて、恭び禱祈めば、必ず任産むことを得。(中略、服部)亢旱の時、此の二つの石に就きて雲し、并祈れば、必ず雨落る。」とある。女夫岩は、古代の巨石信仰が、遺物と近世の文献および伝承によって確実に実証され、かつその信仰が断続的に今日まで継続している、貴重な例であろう。銅鐸については、平成8年10月14日加茂岩倉遺跡から多数出土し、只今全国的な注目を集めている。木幡修介氏によると宍道町の「菟古館にある邪視文銅鐸

は女夫岩の下から出てきたのではないかという人もい。る。そうである(宍道町教育委員会発行『宍道町ふるさと文庫11 女夫岩遺跡を考える』27頁。傍点・圏点は服部)。今から真偽のほど(前ページ下段13行目、稲田信氏の銅鐸の出土云々の話の記載が訛伝した可能性もありうる)が裏づけられるかどうかは判らないが、さらなる発掘調査が待たれる。

私が『風土記』の3石に同定できた石ノ宮神社の3石と白石の谷とが昔と変わらずに残っていることにより、現地に立った我々は白石の谷を往来する機会に3石を眺めて『風土記』のこの神話を生んだ古代人の気持と眼差しとに一体化することが可能となる(当該地点の文献史料のない荒神谷遺跡ではそれができないため、雲をつかむような気持で帰らざるを得ない)。また、女夫岩とその谷が往古とほとんど変わらずに自然のまま現存することによって、古代の巨石信仰の生まれた立地・景観が明らかとなり、我々はあなたも古代人になったようにその雰囲気を感じ、体感することができる。石ノ宮神社・女夫岩とその存在する谷間全体は、自然の景観を失なうことでこの体感が損なわれる危険が多分にある、デリケートな精神的有形文化財とも言えるべきものと思う。

「旧稿」発表後、女夫岩の発掘調査により、巨岩の直下に2段の石垣で築かれた小平坦地が存在し、これが「中・近世近代に再整備された神社跡の可能性がある。」ことを知り、近時果して神祠の如きものが存在したのか、其処で誰がどのような祭りを行なったのかを知りたくなった。これらは、現在では主に文献史料によらざるをえないが、残念なことには女夫岩を祭っていた(？)大森神社の神職家宍道氏は昭和初期に転出し、その際大森神社に伝わる文書を、同社の管掌を引き継いだ現古瀬美明家にも、その後継いだ現秦忠男家にも引き渡さなかったため、両家に大森神社の文書は存在しない(旧稿「70・79頁」)。秦忠男氏(明治44(1911)年生)の令息武男氏(昭和7(1932)年生)によると、僅かに年月無記の明治末年か大正初年頃作成したと思われる(秦武男氏は宍道氏の作成かと推測せられる)神社明細帳の大森神社の部分と秦忠

男氏の父君仁四郎の書写した神社明細帳の大森神社の部分のみを所蔵しておられるという。両者のコピーを比較したところ、同文ではなく、後者が内容を省略している趣きである。残念ながら、両者とも極めて簡略で、信仰生活の実体は伺えない。そして、女夫岩に関する記載も全くない。

幸いなことに、此度大森神社の旧神職宍道峰清の孫、宍道勲氏の未亡人、宍道鈴子氏の御厚意と姪小浜幸子氏のご尽力により、標題の文書を拝見することができた。神社の棟札は、その神社の「存在証明」ともいべき重要な史料で、その神社の歴史や信仰形態、地域史の一端を知ることが可能となる史料である。しかし、神社によっては棟札を記した文書を持たない所もあり、現物の棟札も、例えば、「火事」により古いものは失なったり、とする神社が私の体験でもいくつかある。標題の文書の内容は、宍道家がかつて管掌した大森神社を筆頭としてその他佐々布地区を中心とする小社の棟札を明治初期に網羅的に原物を写し、さらには筆写後の後代に行なわれた神社建造時の棟札の案文を中心に収録している。その他、棟札以外にも、江戸・明治に亘る諸社の遷宮時の次第・参列者・費用等の記録、神社の建造物に記された縁起、神田や建造物の寄進に係わる明細、神社経営に関する証文の写しなどを収めている。

棟札類を見たところでは、大森大明神は修験との係わりが深そうである。大森神社の附近には「寺」のつく小字が多く散在しており、同社の東約200mにも堂前・堂庭・堂坂の小字がある。大字白石の西城寺の所在地は字金峰山であるから修験の存在は確かである。大森神社は地理的に『風土記』宍道社には該当せず、立地的に見て、金山(要害山)をはじめとする附近の山の山嶽仏教か後の修験道、もしくは中世の要害山城主との係わりから生まれた神社ではなからうか。

『八束郡誌』・『宍道町誌』には、これら大森神社とその関連する棟札は掲載されていない。現在大森神社は宍道町在住の秦忠男氏が主に管掌せられ、令息秦武男氏が宍道町の氷川神社を主に管掌し、女夫岩

にも関与しておられる。標題の文書の棟札と現物の棟札とを照合することが望ましいところである。しかし、秦忠男氏は、大森神社と末社の棟札の現在の所在については知らない、と言われる。忠男氏は、現在の大森神社の幣殿に収めてある大森神社の昭和36年の遷宮時の棟札2枚しか存在しないと言われ、武男氏も同じである。武男氏は「昭和36年の遷宮の後に落雷して屋根が焼けた際に神体を外に出し、屋根を修理したが、その時に棟札を見た記憶はない。」と言われる(平成8年11月)から、大森神社とその関係諸社の棟札の現存を確かめることは今のところ望みは薄い。棟札の写しも秦家・古瀬家に伝わっていないから、標題の文書は大森神社とその他の大字佐々布の諸社の根本的史料として、将来神社史・地域史の研究に資することがあるものと考え、ここに紹介する次第である。途中目下の私にとってはさほど重要でないと感じられる箇所もあるが、将来に備え、また省略することによって読者に不安を与える恐れもあるから、煩を厭わずに全部収録した。

* * *

標題文書は、横本で、縦18.2cm、横25.3cmの黒の替表紙。中央に標題を自筆で書いた題簽(緑に模様を印刷。縦22cm・横5.3cm)を横(右)向きに貼っている。裏表紙も同じ替表紙である。本紙は表紙とほぼ同じ寸法、全部で96丁ある。さほど上質ではない栲紙を半折にし、右綴じにしている。後述の宍道峰清の自家製本と思われる。見返しはなく、最初の3丁が遊紙、4丁オから墨書し、76丁ウで終る。途中68丁ウと72丁オ〜73丁オが白紙である。77丁オ以下最後の96丁ウまで白紙。識語・奥書等は一切ない。

筆跡は4丁オ〜71丁ウは途中書体は変る所はあるが全部同一人によるものではないかと思われる。筆録者は、宍道峰清の備忘録と比較すると、宍道家「51世」宍道峰清(天保6年3月29日生・大正8年8月26日没。「旧稿」73〜80ページに「宍道達氏所蔵宍道氏家系図」と解説を収めた)である。以下に述べる如く、本文書は明治13・14年頃に最初筆録され

た。当時の大森神社社掌宍道幸雄は明治17年9月13日附で「及老年」の理由で辞職願を県に提出している（「官令願伺届乙之部 社務宍道家」1丁オ）から、筆録には関与せず、息子の峰清が行なったものと思う。73丁ウ〜76丁ウは、峰清没後、大森神社の社掌を継いだ古瀬秀千代（石ノ宮神社現宮司古瀬美明氏の夫人巨江氏の祖父）の筆跡（別の古瀬家に伝わる文書を「旧稿」研究時に検討しているので、秀千代の筆跡と確認できる）である。

本文書は内容から察すると、当初は神社明細帳提出のための基本資料として、大森神社に伝わる棟札・文書類を集め書写したものとと思われる。その時期は、別の峰清書写の『神社明細帳宍道村・神社遺考』の表紙標題「神社遺考」の右肩に「自明治十三年至明治十四年」と小書きしており、また、目次の第1行目に「社寺明細帳へ起明治十二年自明治十三年至同十四年取調是ヲ村役場ノ根帳トス」とあることから見て、明治13・14年頃と思われる。そして以後書き継いで行ったもので、峰清没後一時古瀬秀千代が引き継いだものである。

峰清は熱心なディレクターで、調べ物に非常に凝る人であった（「旧稿」73ベ）。その性格が幸いして、棟札類も極めて精密に写そうとする態度が伺われ、所々注までも加えている。その為、棟札等の人名が注の屋号によって現在のどの家の先祖であるかも、地元就いて研究すればおおよそは判明するだろうから、地域史の一端を知る上で役立つであろう。この注は当初の筆写時に加えられたもの以外にもある。即ち、47丁ウ左に「五十世宍道幸雄八十八（翁）幽遷」とある。峰清の父幸雄は明治37年8月22日没である（「旧稿」77ベ下）から、それ以降の加筆である。また、48丁オ左下端に「明治四十二年絶家ヲ調フ印×」とあるので、これはその時期の加筆である。その他、丕んだ筆跡の注などは、さらに加齢した頃のものではないかと思われる。

幸清は自らを「宍道神主 早素雄出雲勲業峯清」（「旧稿」78ベ。その他本文書参照）を名告る人物であり、女夫岩を『風土記』猪石とする宍道家の「伝説」を熱心に喧伝した。後掲明細帳にも明瞭に伺われる如

き、人物の性格上本文書の記載内容は批判的な検討を要するが、多くは忠実な態度（22丁ウ〜23丁ウは棟札の汚損も換している）で写したものである。22丁ウ元龜3年大森神社最古の棟札は、後掲『雲陽誌』の「元龜三年修造の棟札あり」に該当するから貴重である。地頭宍道松寿丸は宍道氏の研究に有益であろう。ただ、「敬白」の文字の下の格子状の印が何を意味するのか、現物の忠実な写しによるものか詳かにしない。また23丁ウ右慶長11年棟札の汚損部の「神宮司・出雲臣・随神四郎」が忠実な写しなのか、峰清の主観が入っていないか、不安なしとしない。しかし、棟札の精密な写し、大森神社客殿に祀る金峰山より勧遷した安閑天皇奉祭の由緒書（22丁オ。恐らく修験時代の宍道家の作った伝説であろう）の丁寧な写し、『宍道町誌』の伝説の項に収録されていらない「赤子岩」の伝説（19丁オ右。巻末に拡大して収録）の注記、大森神社の祭りの停滞（社会変動による？）につき地元民が熱心に参与することを約させた証文（の写し。41丁オ）を収録していること等は、学究肌の峰清の探究心と神社に対する熱意によるものである。

* * *

私の関心事の一つは、棟札による「宍道氏家系図」の裏付けである。「旧稿」において紹介した「宍道氏家系図」の少なくとも紹介した範囲（その他は真偽の程が極めて疑わしいものがあるようである）については虚構とは思われないと考えていたが、「旧稿」の範囲内での系図中の神職の実在は本棟札によって裏付けることができ、有益である（松江市内の神職家において、失なわれた家系図を棟札から作成している事例を見たが、宍道家のものは非常に詳しいので、棟札からの復元ではない）。なお、明治初年「50世」幸雄の時に池田氏を宍道氏に改めた（宍道家の文書による）。従って、棟札では池田氏（時に号として宍道を用いる？）5丁ウ社司宍道友意出雲宅久くを用い、幸雄は「池田（造酒）」を名告っている。次には右の女夫岩の問題に関心がある。70丁ウ棟札に「天福天王・地福天王」の名が見えるので注目した。しかし、35丁ウ「大森小森天王縁起」により女夫岩に該当しないことは明らかである。後掲『雲陽

誌』の「天福天王」に該当する。結局、本文書による限り、女夫岩正面祭壇には、江戸時代から明治時代において、少なくとも「大森神社」に所属した棟札を伴なう社祠は存在しなかつた可能性が大きく、また、「神社」として宍道氏が扱かつた可能性も小さくなるのではないかと推察される。前掲『女夫岩遺跡を考える』に掲載された女夫岩を正面から描いた絵（江戸時代とする）には、両岩を一周するらしい注連縄が掛けられているが、社祠は描かれていない。

本文書の内容事項・諸社の逐条紹介の時間を持たない。以下に『雲陽誌』次に『宍道町誌』にも収録されていない、諸社が収録されている、秦忠男氏所蔵大森神社社明細帳の大部分を引用し、本文書中の諸社と対応させるための便宜とする。明細帳の「由緒」に女夫岩を「兩猪ノ化石」としてこれを宍道の地名起原としたり、大森神社を宍道神社としたり、周辺諸所に大國主降誕の伝説地ありとするなど牽強附会が多く、江戸時代（未？）からの宍道家による運動が伺え、秦氏の推測通り、宍道氏によるものである。 「由緒」の文章は、峰清の明治30年備忘録中（42丁ウ、43丁オ）その他何方所にも同じ文章が見えるので、峰清作と判断される。「由緒」の内容は修験に関わる可能性のある記載はあるいは参考になるかもしれないが、私の研究では「神籬坪」（『風土記研究』14号拙稿）を初めとして、多くは信憑性に乏しい。

佐々布

大森明神 素盞鳴尊をまつる。（中略、服部）元龜三年修造の棟札あり、（中略、服部）

熊野権現

八幡宮

加茂明神

宇賀明神

客明神 建御名方の命なり、

天福天王

若宮

天照大神

荒神六十五ヶ所

（大日本地誌大系42 蘆田伊人編集校訂『雲陽誌』126べ、雄山閣出版、'71年、東京）

島根県管下出雲国意字郡佐々布村字大森

村社 大森神社

一祭神 国作大穴牟遲命

合祭

須佐之男命 少名彦命 事代主命

安閑天皇御詔広国排武金日尊 出雲建雄命

明治五年壬申合祠元境内大森比女宮 伊勢両宮 末社子守社 元名天福天王 客戸明神 以上在雲陽誌

合神及鎮守社 竈山八幡宮 樺火神社 天満宮 柏木若宮 葦原祭神社 金刀比羅神社 大仙神社 走若宮 奥畑若宮 金屋子神社

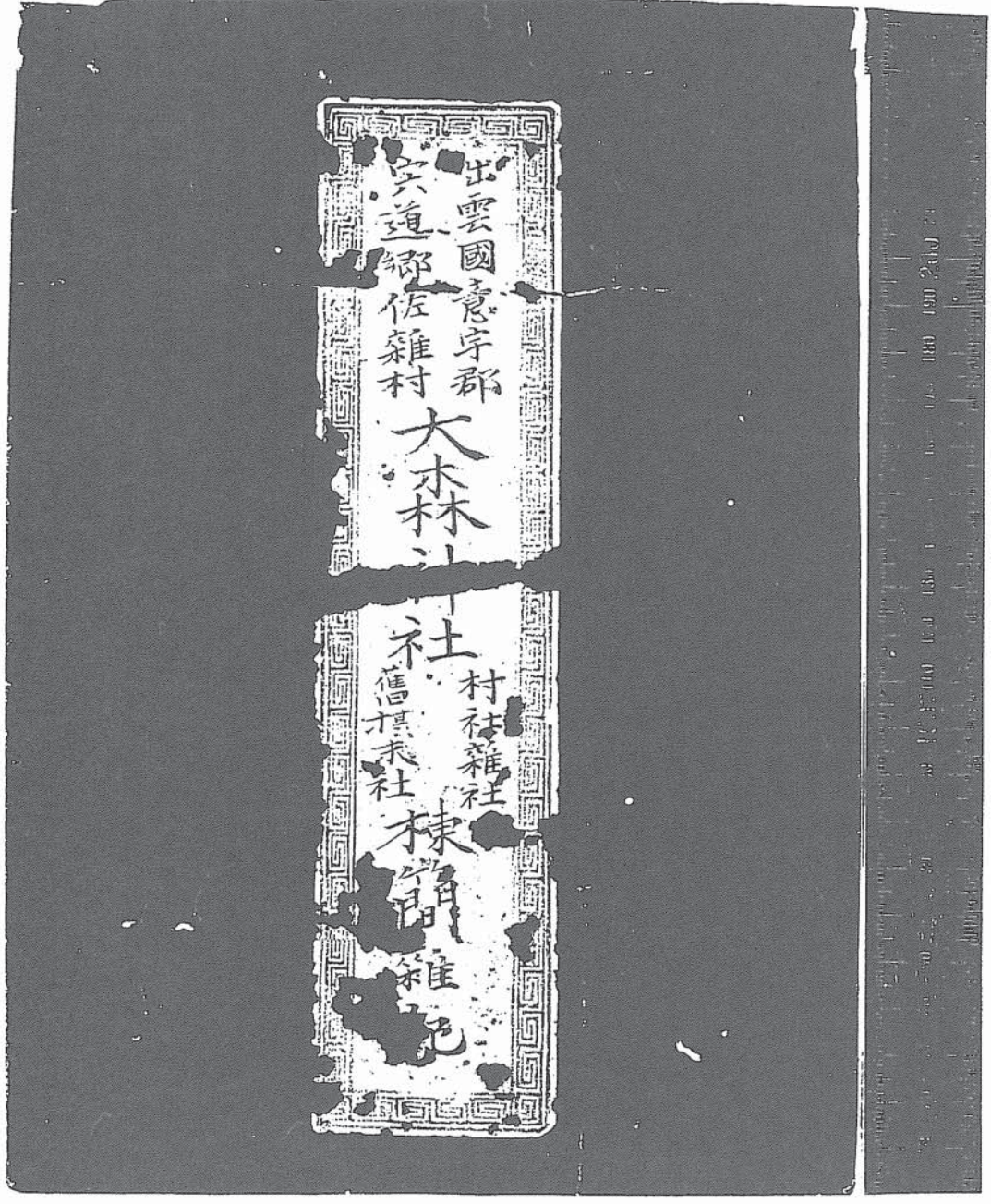
境外末社六字 明治四〇〜四一年合祀す（万年筆で後の加筆：服部）

宇賀神社 山時八幡社 熊野神社 民部神社 天津神社 加茂神社

一由緒当社ハ大古所造天下大神御農事ノ靈時ニシテ御親狝ノ牧場アリ故ニ兩猪ノ化石アリ是ヨリシテ宍道ト云フ名称ノ本源トナリ則猪路ノ神籬タル宍道郷宍道村宍道神社ニシテ即今本郷ノ大森ニアリ地位ハ宍道川ノ中流ニ突出シ神社ハ宍道郷ノ中黄ニ鎮座此郷内ハ大國主ノ大神ノ御降誕ノ地ニ著ルシキ烏帽子岩抱岩赤子岩各有ニ字産部ヶ谷真兒産御腹屋敷子守子離子屋之谷等古称ノ地名ヲ有ス干時正曆三年壬辰八月大和国吉野郡金峰山ヨリ大和風土記曰賢久母天皇之御靈像ヲ勸遷奉崇スル安閑帝春日皇后相嘗ノ客殿セリ当時齋本宮葦原三宮大森大明神ト称シテ神園ノ堡城アリ宮員社務タル上院六坊下院六坊アリ旧趾ノ地名存セリ是ハ文治ノ曆鎌倉権政ノ武断ニ係リ爾后専ラ佐々木受領ノ際廃興ヲ極メリ

一曰中本郷ニ字神籬坪ノ旧称アリ又康正元年乙亥大森ヲ以田面トセリ之レヲ森原ト云フ大永三年癸未神龍山ノ大森大明神ニ合神各祭ノ礼典ヲ經營セリ（後略……服部）（終）

（平成8年11月30日受理）



出雲國意宇郡
大木林

大木林

社
村
雑

棟

雑

表

元錄拾六年

奉造五熊野大權現御社一宇

笑

未禊有月吉日

盛

年

十

社奉行 有澤左部
皆川權兵衛

國主松平出羽守綱近

社司宗道友意出雲守

兼

三嶋治花衛門
三嶋仁衛門
左藤善三郎
同 治兵衛
持田與次衛門
福島佐伍衛門
在司長三郎
江藤清花衛門
小玉澤長花衛門

小嶋傳兵衛
言迴與右衛門
同 五兵右衛
同 庄 即
同 七兵右衛

雲川 志忍子郡小伏名村 兼本領三嶋 兼本領三右衛門
在屋本常仁左衛門
每安寄言迴源衛門
本領三嶋 兼本領三右衛門
出雲郡津須村
大工職梅六兵右衛

打鳴江陰林江陰泚江陰 江陰周也 古鏡塗直字在周
 御膳字清卿永字清卿 御字清卿 御字清卿 御字清卿
 律書出是異議 律書出是異議 律書出是異議 律書出是異議
 神書和漢書始 神書和漢書始 神書和漢書始 神書和漢書始
 白學直橋 白學直橋 白學直橋 白學直橋
 烏箭昌子 烏箭昌子 烏箭昌子 烏箭昌子
 之張永瀨 之張永瀨 之張永瀨 之張永瀨
 智中 智中 智中 智中
 供奉式 供奉式 供奉式 供奉式
 古瀨帝陸 古瀨帝陸 古瀨帝陸 古瀨帝陸
 漆宗大學 漆宗大學 漆宗大學 漆宗大學
 家宗信濃 家宗信濃 家宗信濃 家宗信濃
 大坪内親 大坪内親 大坪内親 大坪内親
 遠陸 遠陸 遠陸 遠陸
 神八 神八 神八 神八
 昌子久次 昌子久次 昌子久次 昌子久次
 武田喜之四 武田喜之四 武田喜之四 武田喜之四
 永瀨平 永瀨平 永瀨平 永瀨平
 空迎 空迎 空迎 空迎

右

差羽 神女

至基並 江藤草十

武白涼次部 伴藤凉次部

神 禰

江藤推次部 高元安世職

永瀬熊老部 江藤丸老部

差羽 神女 凡張 江藤又四部

永瀬花老部 合逆老部

左

遷造王造酒宗道重幸年出雪皮

從者 二員

勸請遊 皇子女之御

大輝高橋遠江丹藤宗美哉哉

從者 三員

大赤林大明神 御未社

比乎賀大明神 上庄比賣神 比賣七百文

比乎高勢神

比賣比賣

比乎比賣比賣神 大赤林大明神 比賣七百文

四

白齋 孫三在月 林對五部 檣才 下流 共抄
 御儀 田彦考 子高附 人自空持 二名白齋 以行 列
 御儀 大田 甚二部 金銀 次部 孫即 下流 次部
 正遷宮行成 熊部 社
 祖父元三年辛酉九月廿八日執行
 神主進彌正空道空手清空宮臣
 左 九羽 社子 空基盤 二鳥 森 有明
 持四 森 空 二鳥 森 次部
 神樂 空道 空脚 二鳥 森 有明
 右 九羽 社子 几張 空迎 請事
 空道空手清空宮臣
 神頭 八

法日 鑄造行車 社宗一丁才

遠 漳華 雜 膠 不 之 耶

空 行 列 武

金 部 乃 自 村 清 衣 至 開 合 拍 子 冬 部 未 詳 村 折 鳴 宗 志 在 御 門

柳 字 根 札 三 官 生 右 至 門 鑿 空 通 慶 前 不 殘 皇 毫 官 通 膳 次

玉 鏡 注 同 樞 吏 部 柳 字 根 札 同 大 至 門 同 上 內 為 鑿 吏 部

柳 字 根 札 作 膳 乃 大 部 同 上 空 通 絲 聯 同 上 內 鑿 惠 六

石 燈 等 毫 空 通 空 通 在 耶 二 乃 二 官 符 妙 執 乎 持 田 惠 八

柳 字 根 札 作 膳 去 盡 三 部 柳 字 根 札 同 三 官 吏 部 兵 正 神 柳 字 根 札 從 臆 源 耶

三 乃 空 通 染 卯 空 神 鉞 昔 田 絲 部 四 神 鉞 八 足 三 官 吏 部 柳 字 根 札 之 官 柳 空 同

華 乃 空 通 畫 之 耶 唐 柳 字 根 札 未 詳 法 和 從 皇 毫 時 毫 土 從 冊 十

掛 盤 三 官 吏 部 同 御 執 三 官 吏 部 是 明

本 錦 元 張 官 通 漢 西 部 性 康 持 田 六 左 漢 詩 鏡 三 官 吏 部 十 三 事 在 產 長 後 月

棟 札 三 官 吏 部 三 部 純 子 三 官 吏 部 齊 文 張 二 官 元 次 薛

供 奉 咸

和 田 守 加 貝 其 膳 空 心

進 者 二 頁

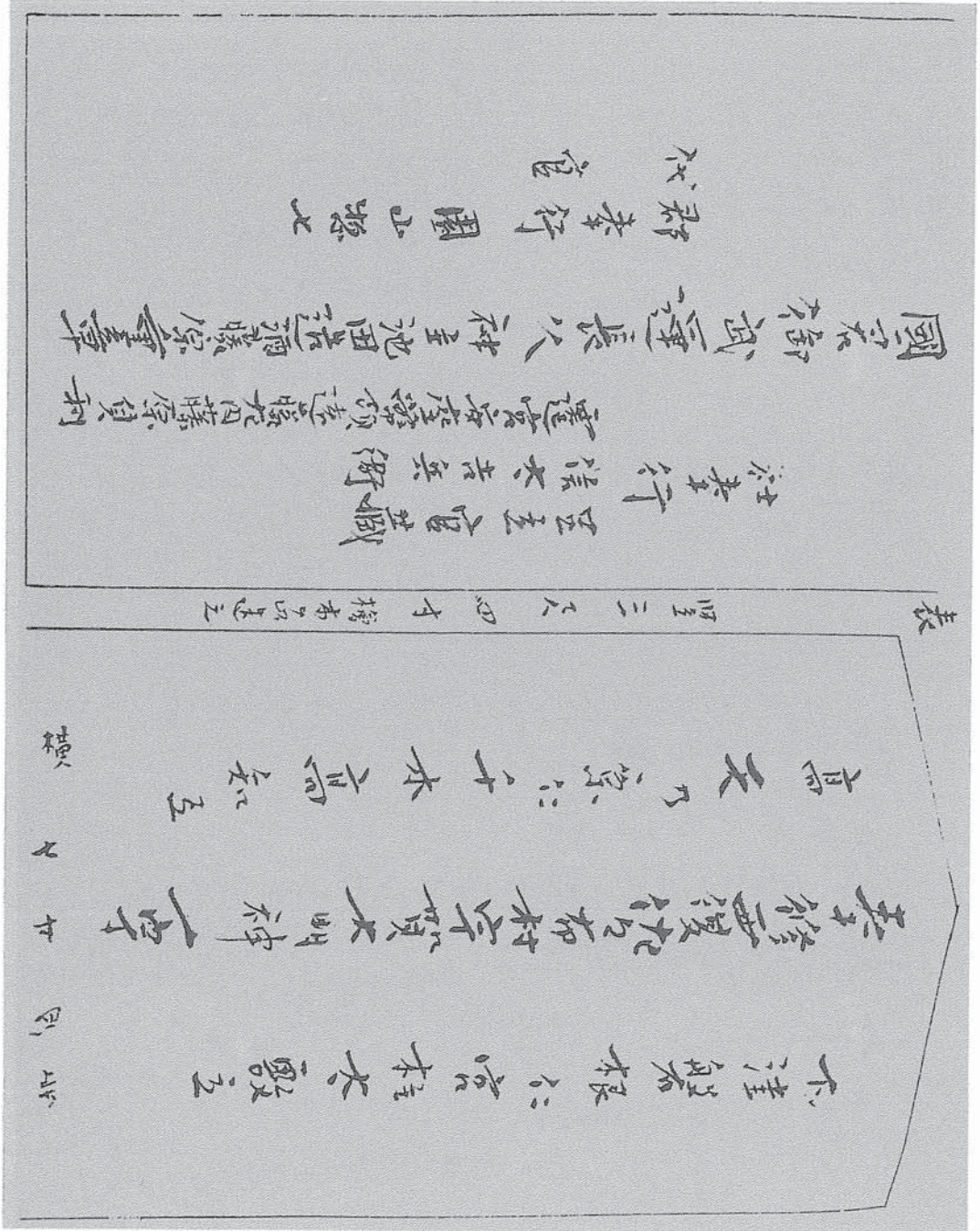
字 圍 長 門 其 膳 空 心

口

大 坪 僅 十 八 千 綱 字 口 三 頁

表

<p>下津船名根_レ宮柱火殿互</p> <p>基_レ修_レ世_レ盤_レ熊_レ望_レ神_レ社_レ字_レ國_レ主_レ松_レ年_レ出_レ和_レ穿_レ深_レ安_レ安_レ公</p> <p>長_レ欠</p>	<p>社奉行 村 義 正 与</p> <p>高 井 新 藏</p> <p>社主 池田 甚 通 世 空 道 全 幸 年</p> <p>遷_レ治_レ安_レ世_レ盤_レ熊_レ望_レ神_レ社_レ字_レ國_レ主_レ松_レ年_レ出_レ和_レ穿_レ深_レ安_レ安_レ公</p>
---	---



表

四三二尺四寸 檜布此巻之

不注解者根尔富桂长殿之

天子修德礼与布村宗贤大明神一字

高文凡尔尔千本高知互

空王官位職
社奉行 法太吉兵衛

達富安産翁 遠懐光内膳原負利

國右衛門尉運長八神主池田甚頼儀宗重章

郡奉行 園山惣七
代官

大木林大明神御赤社

妙見神社 正遷座迄

廣應三年癸二月二十三日執行

御役殿字加貝神社御赤社

遠尊尊幣 高橋屋女部

氏子行列 寄附惣入別

黒澤常江藤利市 止首橋屋春五郎 麻筒山堂次五郎

折鳴經 永瀬住即 止首堂次五郎 止首澤半四郎

在阿波 永瀬久在衛門 永瀬堂上堂次房十 五郎 加藤唯市

樽流 永瀬千郎 樹立堂次善三郎 振鈴 永瀬 孫郎

大榊首橋達其陽 鉦鼓拵之即 至繁年 高橋喜五郎

玉年 住産長赤月 石張 江藤卯中 若年 永瀬宮千郎

額首高橋伊草藏 棟札 堂澤美善藏

清目 阿波藩行事 社家

四碑銘 庄本郎 奇奇市 堂本郎 金二郎

上六道六之麻弓堂字清出堂修

表

長 二尺 七寸 和布名也

社司 池田有喜 贈 宗次

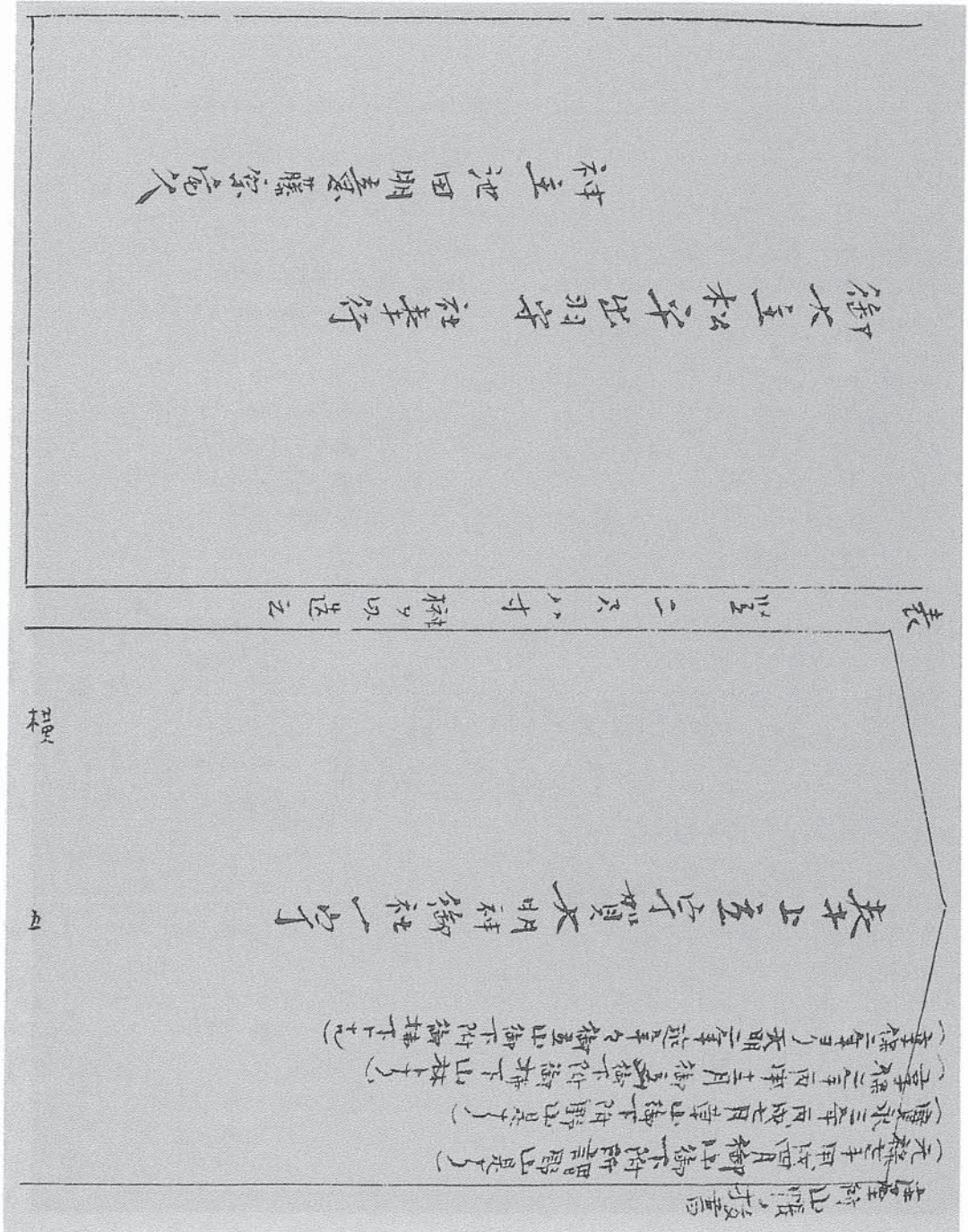
御長主松平出羽守 經近公

吐普加 依母年女 實吉村 貞利 林院 見

志事 上 五 次 加 貝 大明神 御社 一 次 字

波 逆 羅 伊 玉 意 者 御 目 出 玉 布

總 中 十 四 五 分



表

<p> 右陸 一番 江坂長介 二番 本城長九郎 三番 佐渡 久重 四番 沈敷 如左 五番 竹田 來吉 六番 竹田 仁 右陸 一番 長波 隆 二番 周吉 好孝 三番 庄司 邦房 四番 高持 亦房 五番 庄司 角之 以上十八御家座敷人数 </p>	<p> 明徳元年 百五十三 庄屋三嶋三郎兼左衛門 生年高橋亦左衛門 本領 岡 西五十二之氏子 烟 村 大工松江村長六 小工岡平野中涼助 本領岡平鳴屋守三郎 </p>
--	---

表

全二尺九寸五寸 板本より以て之

下津船名板に當りて大敷に	七
華進堂世陽書堂子孫傳世御宗印朱明神一守	四
高天月宗仁舟本亦而和互	三

大工 柳田三六

國名松子寺年代社奉行 田中藤右衛門 山園長右衛門 柳達長次

社主 柳田友喜 藤原宗次

表

明弘元各述
丙二十五年

幸保十九守靈曆

天長地父社觀女康

三月二十六日

園目

高橋平衛門

陸屋三嶋正六

有田清三郎

字守重治部兵衛

同仁 茂

因江藤孫三兵衛

同吉左衛門

本領 同入

堀田長次郎

同江藤治兵衛

在藤久兵衛

同高橋孫兵衛

知江藤吉兵衛

同長左衛門

在司孔長右衛門

有田次郎

在藤吉左衛門

坪田利兵衛

在藤十兵衛

在司孫三兵衛

竹田仁兵衛

岡義兵衛

宮田八兵衛

小島五右衛門

江藤源四郎

長瀬太郎

岡吉右衛門

村中息次郎

表

聖三尺寸 極本口以是之

<p>天津館有根仁宮柱大駁五</p> <p>表年無復重陽高字難從都鄉字豐大明科一字</p> <p>首而天乃宗仁千本首知是</p> <p>聖</p>	<p>選定女座學破遠味三國瞻亦美刊</p> <p>魏卿大夫</p> <p>國在也唯少將宗行公 社奉行 伊東主計</p> <p>當社司池田重隆祭高次</p> <p>女工吉田清男</p>
---	---

兼

十二伍子

明治元年迄
百廿二年

宝曆拾四年

庄屋杉谷末右衛門

年寄高橋秀左卫門

同 長瀬多助

本領高橋秀左衛門

同 高橋松四郎

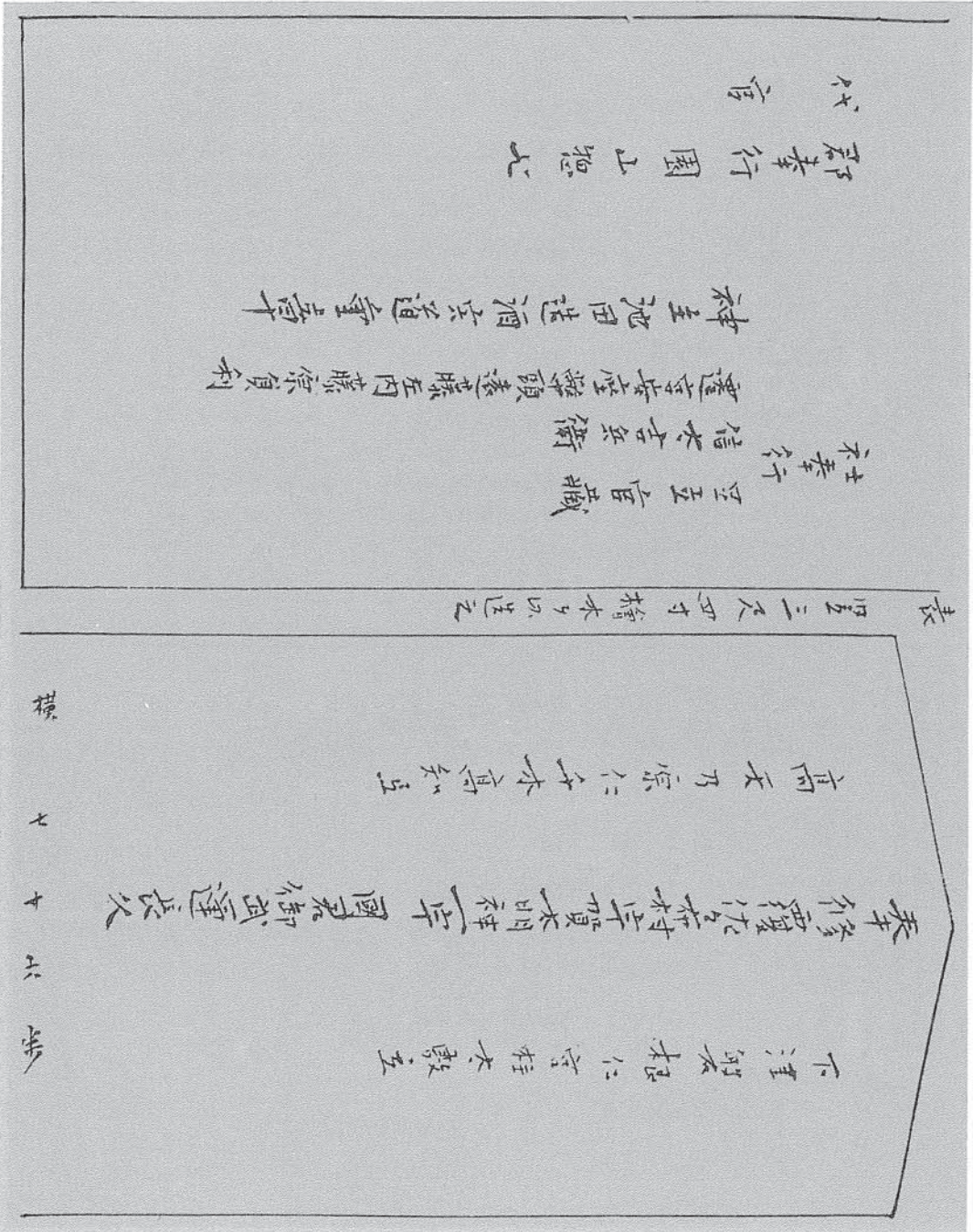
天長地久社領安康

同 長瀬多助

同 江藤派兵衛

同 江藤彦七

六月四日



代官

郡奉行園山惣七

神主池田達酒兵衛重高十

遷宮甚座遊頭遠藤左内膳宗負利

社奉行
信水吉兵衛
空五官藏

表 四三二尺四寸檜木より造之

高天乃原仁木高知五

奉修繼仁木村字加賀本明神字園君御武運長久

下津船起仁宮柱本敷立

廿六日
廿
廿
廿

女田

本林園清基孫

兼職加次月戸

角
清基
十員
利庄
三郎
中

園之目

吉在正門
美在正門
孫在正門
五本正門
清三郎
藤
與

文
八
小三郎
洋左正門
孫左正門
文
園
四

大兵衛
童八
文左正門
園
惣
爲
吉郎
正門

傳
七
志五郎
戸
六正門
熊
次
本五郎

兼

癸丑三月二日

每堂
自
依藤喜左正門
兼
永瀨
大郎
正門
木掩

嘉永六年

長把父社額安康本領
江藤
善左衛門
高橋
善
藏
高橋
善
藏

住屋三嶋仁正門

大工棟梁

成田三太郎

分開天皇之御傳記 中古關之開張之緣起

柳三朝清千中之帝上御奉以八百三十八代安開天皇御事

此帝御父繼體帝式敷敷而御安座之至三鐘山御基興成

欽御安位皇御事御傳記之於皇鏡記之上大傳其禮樂

津島男入等傳記之迎奉大和國橿原宮之為御位等

先安國志御禮國傳傳其女鏡之故三向橿原等

御事辨金皇等奉安上御事空位奉三軍中平月國等

御位國之御禮國御禮國御禮國御禮國御禮國御禮國

殺之御明帝御事御禮國御禮國御禮國御禮國御禮國

六東御事常有自取上御禮等而諸體安開宮之三

十五年平皇等御之內輪繼之三政律成皇位民傳福

四西之皇定全備降國之商機取國之御禮澤之

三時千六代傳時御事國德之清而禮正曆二年三月

御事御禮國御禮國御禮國御禮國御禮國御禮國

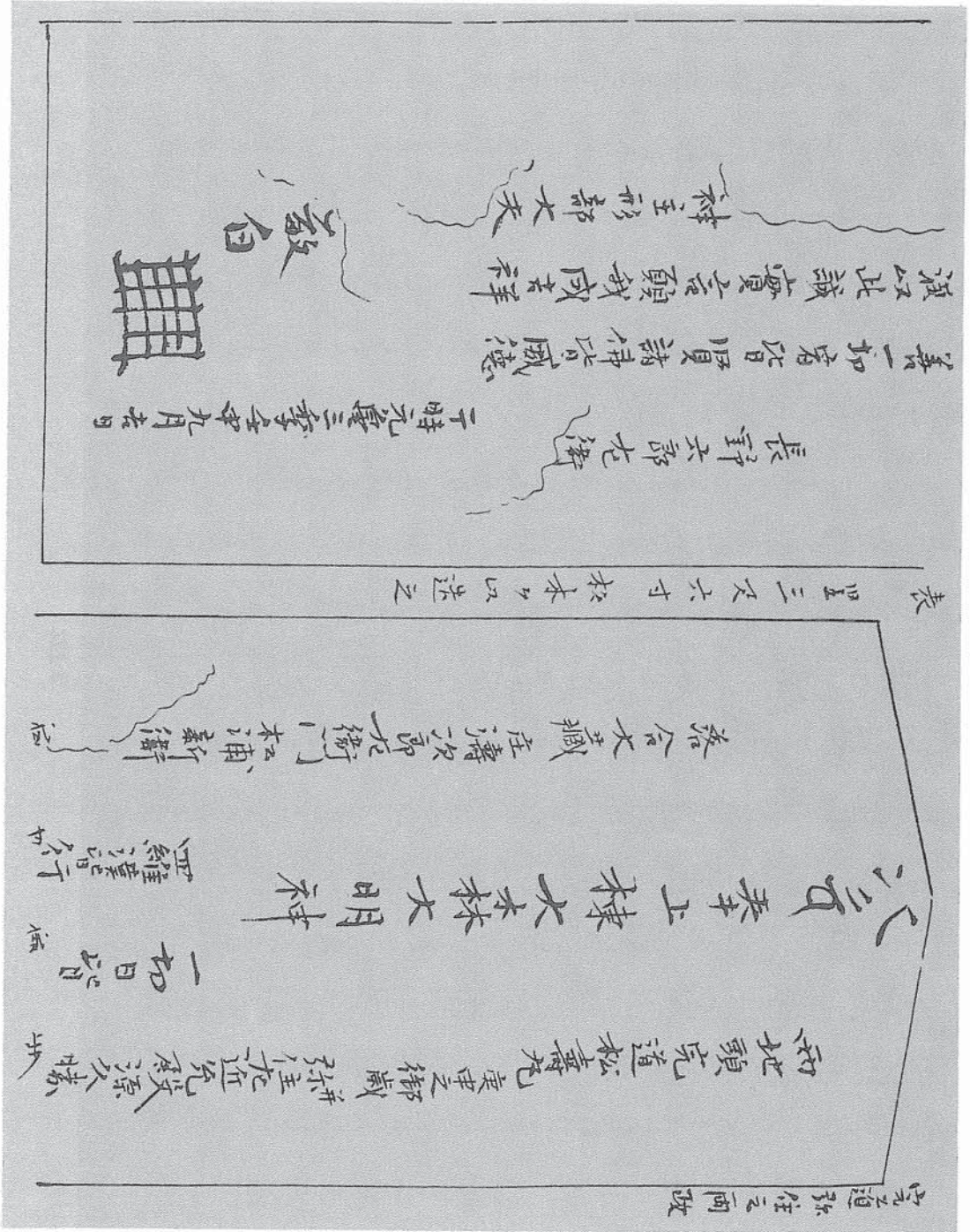
南之皇峰山之梅禮本之以述之天皇御事御禮國

先承天皇森之明神御事御禮國御禮國御禮國御禮國

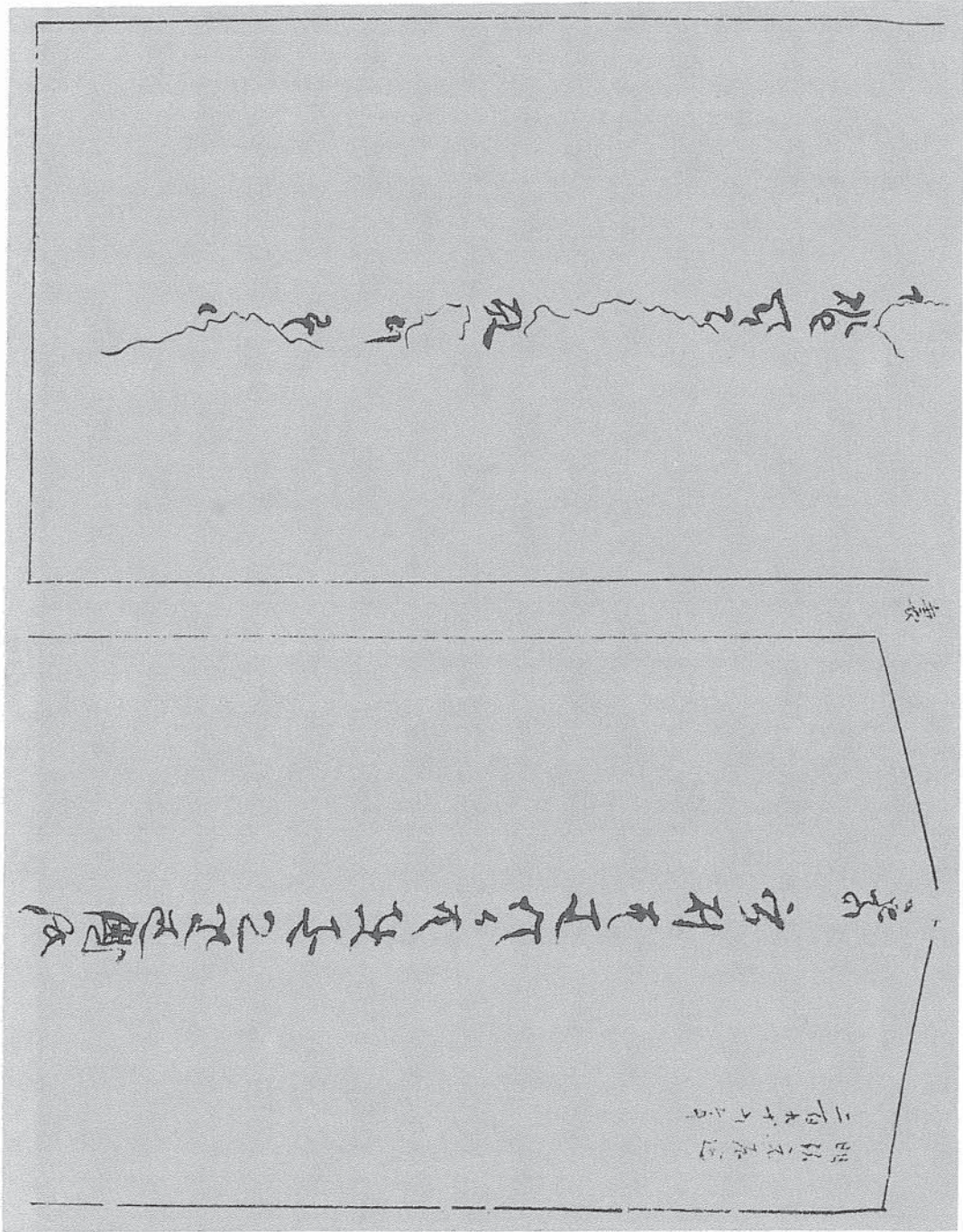
開蓋有至皇皇德之皇世皇采禮之公探其康樂三

寬政四年壬子八月十七日自奉祭執行

幅書尺七寸



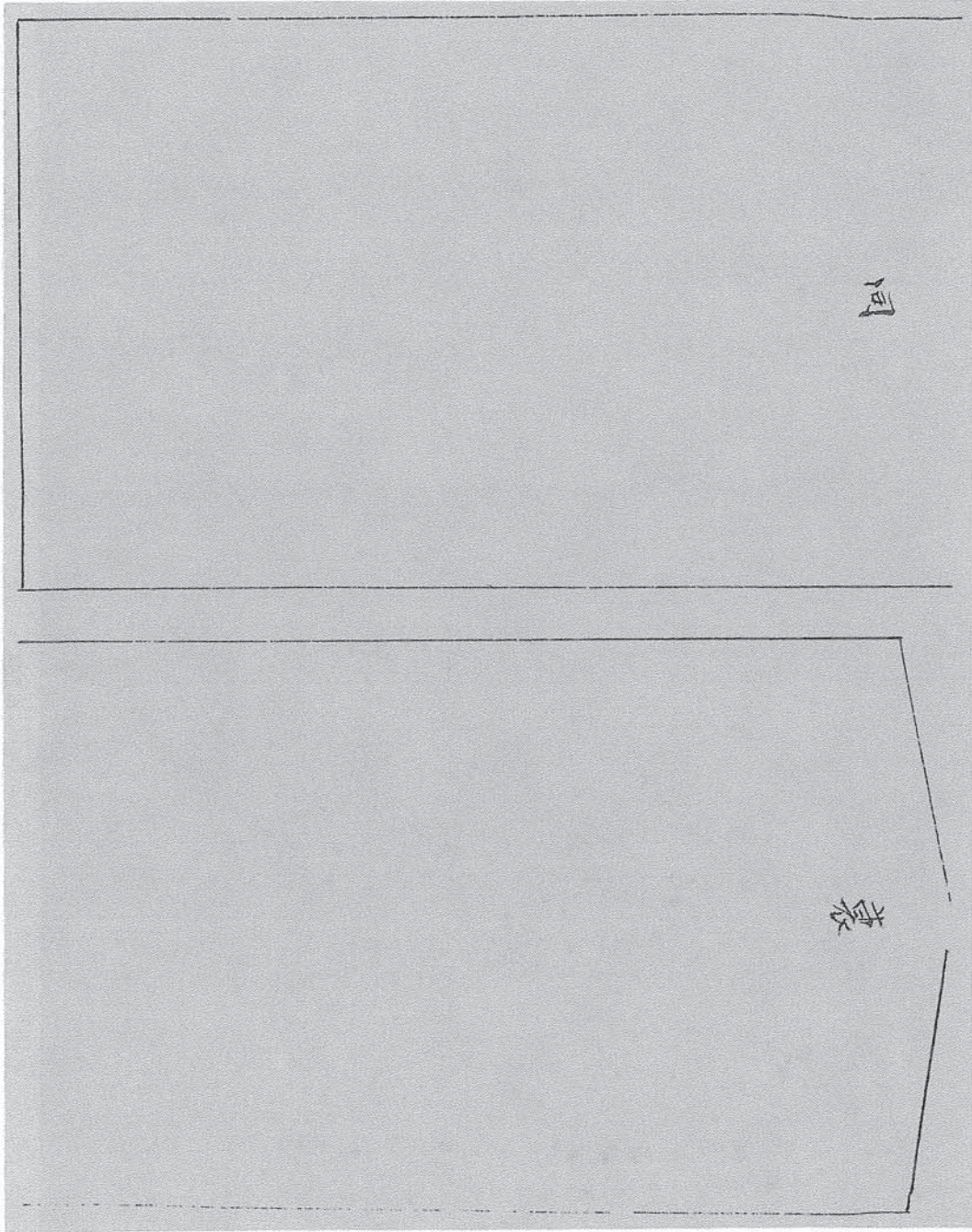
23丁才



表

<p>實言 願我成吉祥</p>	<p>戒德 四難此行滿 急急如律令</p>	<p>比善 一加若皆賢</p>
<p>以斯識</p>	<p>諸公皆</p>	<p>一加日</p>
<p>和字置現 爾十五年陰三月廿日 松江 城 復文六年二月三日 犯去 復長三年 補官 到成</p>		

<p>神王五位越前守重業俊清 女 奇中 代官 洋作 兵衛 名分十二氏子 大工内藤與右衛門藤宗家次</p>	<p>松子 廿五 政 (寛永十五年三月松子氏入嗣) 寛永二十一年 未 正保四年 同 會 慶安 四年 申 若狭 德三 女 南子 明 曆 三 年 公 西 延 宝 三 年 子 寛 文 十 三 年 子 寛 文 十 三 年 子</p> <p>奉造 大木林天明 寺神前屋室 内寺長北 飛騨園 瑞 辛丑 十月 吉日 寛永五年 出世 園守 城守 志 晴 唯 生 三 江 三 坂 北 (按三指時世園守久 壽 櫻 若 坂 守 村 慶 高 十 六 己 鳴 呼 也 高 出 世 久 矣) (松子出前寸直 寛永五年三月廿日 松子入城)</p>
---	---



表

徑五二尺五寸 松木ヲ以造之

封

寒 言神尊利根陀見

六

十

六

六

封

吐 普加身依身多女

雲陽意字郡枕字中本林大明神靈之廟造宮觀城感應

遷臣子女空遠膝掃郡藤徐縣刺曲之

郡史速水身布兵傳

在公本穿花衛

大君松平出羽守社奉行

心田八兵衛

季吏西江章本講門

當社司官池田夜臺空進宅父

蒙

此紙之卷通
百五廿六日

大正臺灣來天藤銀家次

庄屋三郎左衛門

平時在總三矣已四月矣。本領三嶋與三右衛門
本當仁在衛門

十二氏子

孫兵衛
涼右衛門
新右衛門
守右衛門

龍共言

表

堅 二尺六寸 松木以以造之

遷宮 山座 遠藤主馬 其勝可利

社奉行 津川六郎 右衛門
庭方九郎 右衛門

當田 社司 池田左衛門 遠直久

下津 鯉 根仁宮 柱木敷立

廿

祭 修 西 復 大 本 林 明 神 一 乎 國 君 松 乎 出 羽 宗 衛 公

廿

高 灰 京 仁 乎 木 高 知 互

廿

款

大正安原平本史安記同權八同文七本槐定治

注屋是六

彦三郎

安右衛門

安右奇

義右衛門

彦九衛門

明治元辰地
有六十七三

寬延三度占歲

三嶋弥右衛門

赤願三寫安右衛門

赤常徳九衛門

九月亦一日

赤長地及

表

長三足五寸七步 松木以造

仁高知

水

下津盤 根仁宮柱 大敷五

中

水

造五本林大明神社 宇國景本乎成川守源治 解

中

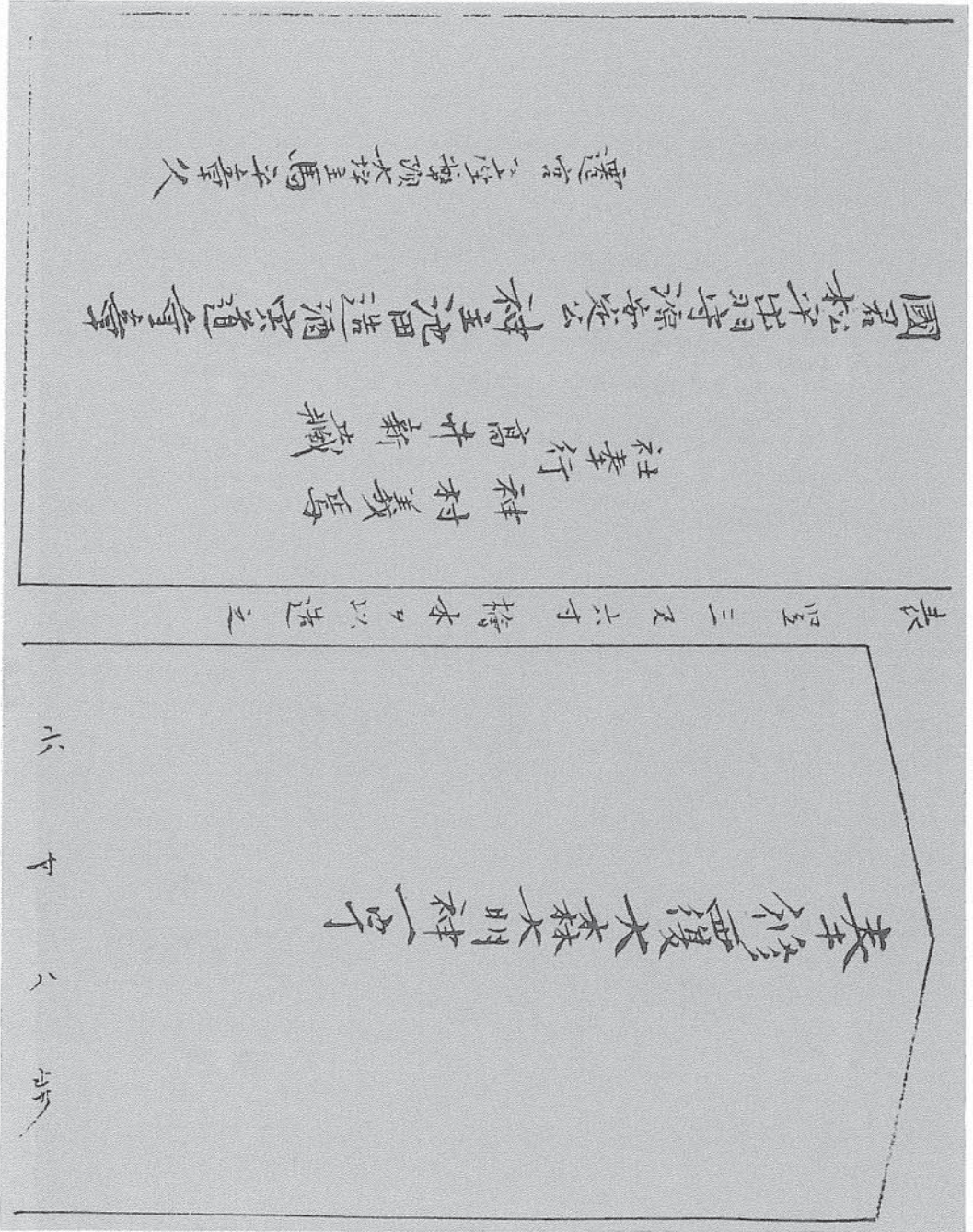
遷宮安座御遠藤河内正藤高殿

土奉行 有馬勝助
社奉行 奥田新右衛門
社主 遠野寺出雲臣邦教

君奉行 荒中御市

代官 比企清明

表 堅 四 尺 二 寸 檜 杵 以 込 之	
社 依 身 女 々	社 普 加 身 々
奉 行 經 大 林 大 明 神 宇 國 皇 御 武 運 長 久	
社 奉 行 高 本 權 平 堀 桑 右 衛 門	
社 主 池 田 權 摩 格 道 重 平 方	
聖 宮 女 官 御 遠 藤 公 内 正 權 宗 歲 演	



開元聖德太子大木村大明神社奉備寄附遺者也此
 三嶋四郎右衛門
 將甚即敬白
 神連池田左承有宣直久敬白

是神皇之在木村定矣即自一統受出山之因也此二般之
 斗二酒入而開聖田故有若乃而家村中八氣一輕馳身亦村
 地故聖出此事一食相知也一以名先此所之形見公何送者
 此與不此形送者一食故去入後也一乃亦止之申之有者
 此身出矣亦知方之開田致出者亦亦而故三嶋寄附傳
 相木森田家文在史方之呼相談一上馬在方于大木村大明社
 社之神田是無事一如古右極寄附由原尻神田也預出森聚
 田故一在傳往神田に奉備度之相談一繼着若島丈之劉出者

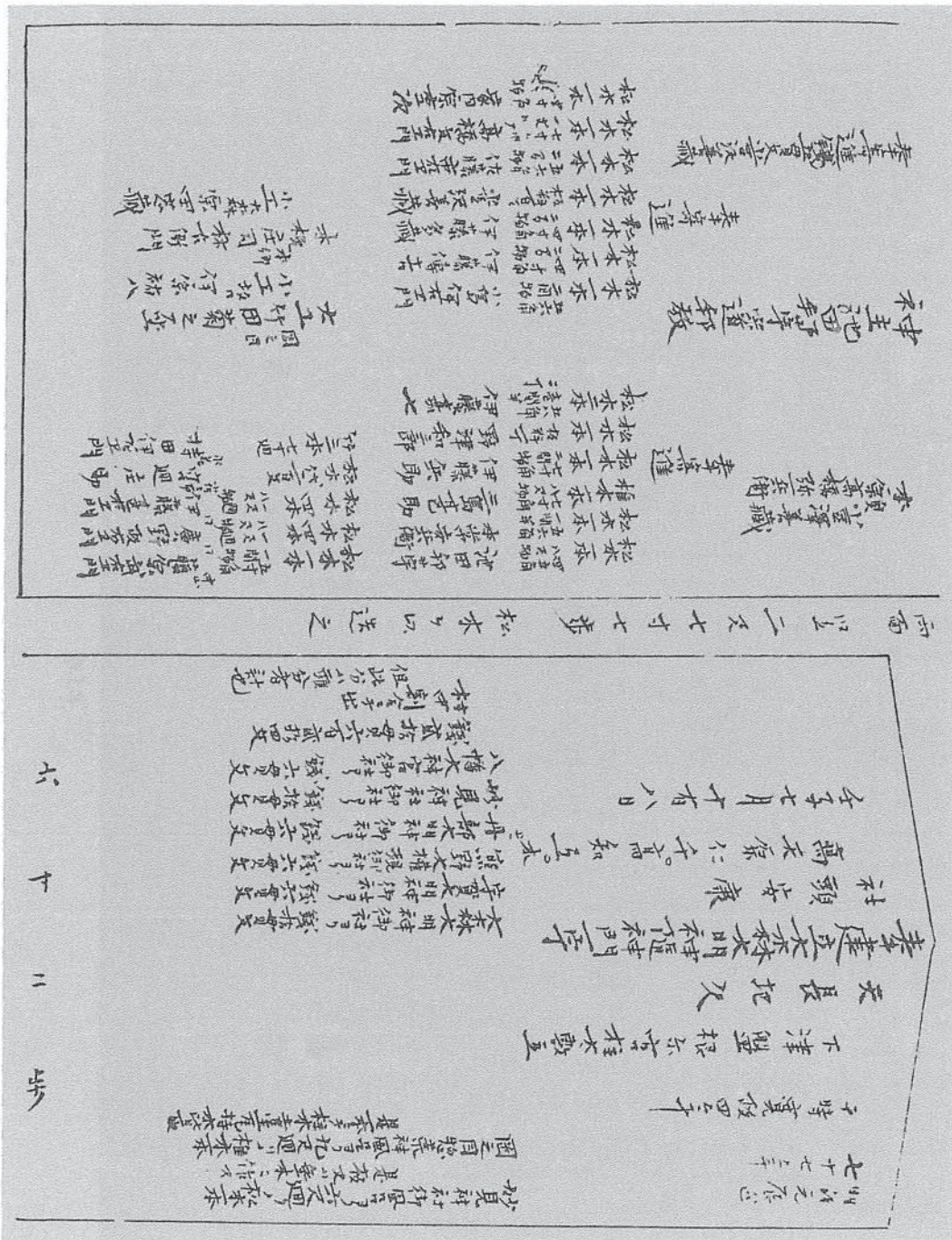
神主池田豐盛道直久護白

有德木之同生念高迴功高各術永代嘉慶一挑管聖書之各皆軍
 之美是也 亦外本森林誦挑聖之 加附一張者、是也五種之各在德
 希一因念聖可申一善道之各也
 又如以中平字誠秘家由保本取、弘安本取、六休一不、坤、至數
 主敬書和史習行象本也持、向一因替地、弘、正、兵、出、不、查、為、弘、以、故、儀
 而中、山、三、平、一、盛、取、一、下、田、一、取、寄、此、以、故、以、故、有、其、增、所、替、地、致、

永代神田定者備寄附聖書也

次

<p>神主池田上總 宗道周久敬白</p>	<p>表 匠二尺八寸 松本リ以造之</p>	<p>明治三十四年 九月十六日 安永貳癸巳歲 奉建立大森大明神廣前鳥居一守 六月二十九日</p>
----------------------	-----------------------	--



明治元辰
七十七年

子時寅辰四子

天津盤根尔官柱木敷五

天皇地及

奉建史亦林大明神隱村月守

社頭安康

高天原仁子富知馬

壬子七月十有八日

妙見神社行燈了字之題、松本
是板文並本二作不
因三自題、荒神風号、北之題、一權本
是奉、權本、是持、松本

本林大明神御社、
宇賀大明神御社、
宇賀大明神御社、
宇賀大明神御社、
宇賀大明神御社、

丹波大明神御社、
丹波大明神御社、
丹波大明神御社、
丹波大明神御社、
丹波大明神御社、

八幡大明神御社、
八幡大明神御社、
八幡大明神御社、
八幡大明神御社、
八幡大明神御社、

松本縣立第一
松本縣立第二
松本縣立第三
松本縣立第四
松本縣立第五

松本縣立第六
松本縣立第七
松本縣立第八
松本縣立第九
松本縣立第十

松本縣立第十一
松本縣立第十二
松本縣立第十三
松本縣立第十四
松本縣立第十五

西面上二尺七寸七步 松木ヲ以送之

松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立

奉寄進

松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立

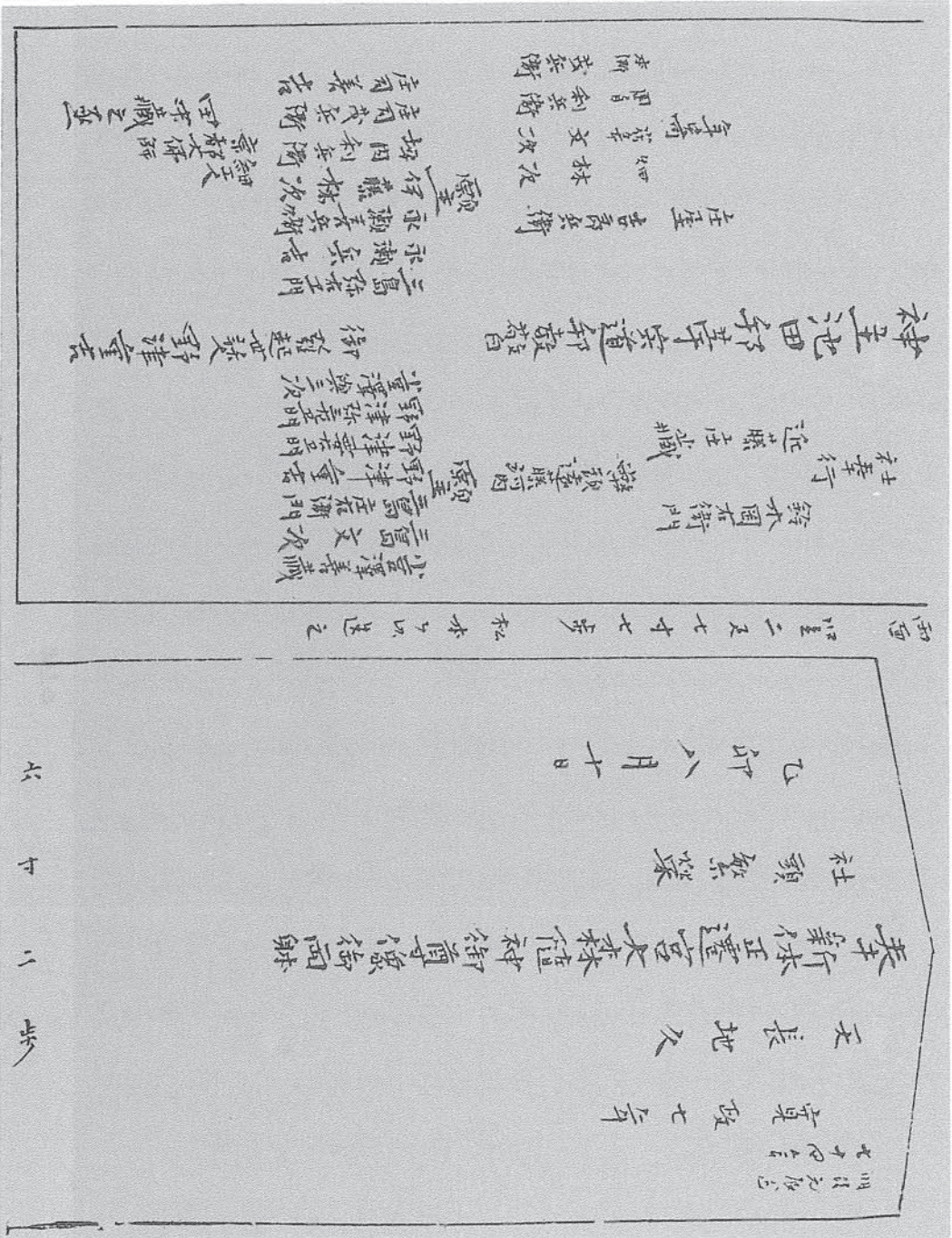
中主池野守送致

奉寄進

松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立

大正田菊之壺
小正田菊之壺
小正田菊之壺
小正田菊之壺
小正田菊之壺

松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立
松本縣立



子四月廿四日

午時 嘉永五年

天長地久 奉勸化

名存如答 同大森林花

大西畑谷 同園之目花

大工 與重

小馬 大工 與重 小馬 與重 小馬 與重

高天原尔 千木直知良

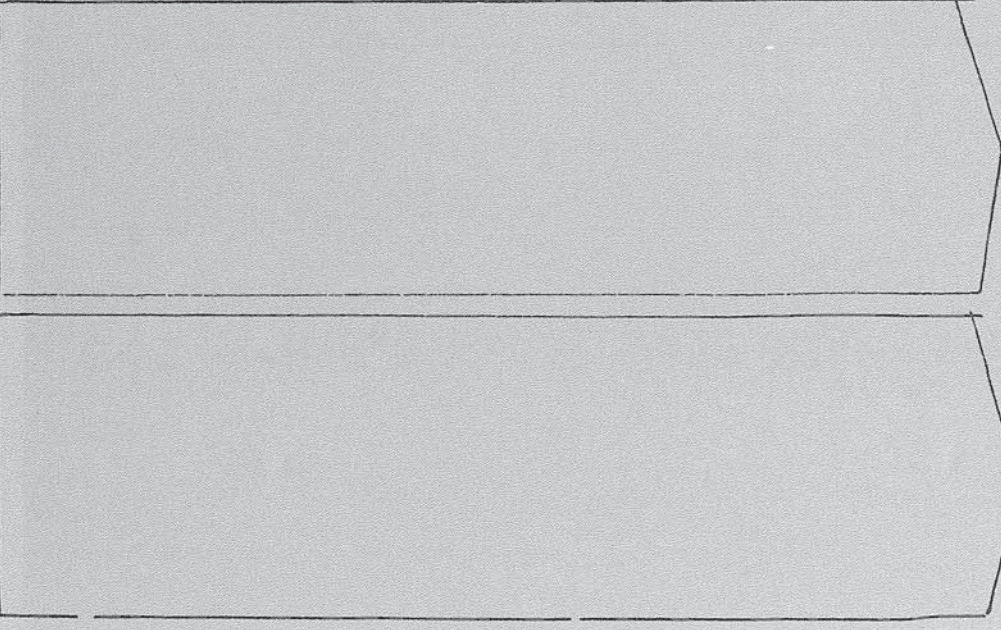
表舟再建 大山權現石至殿宇

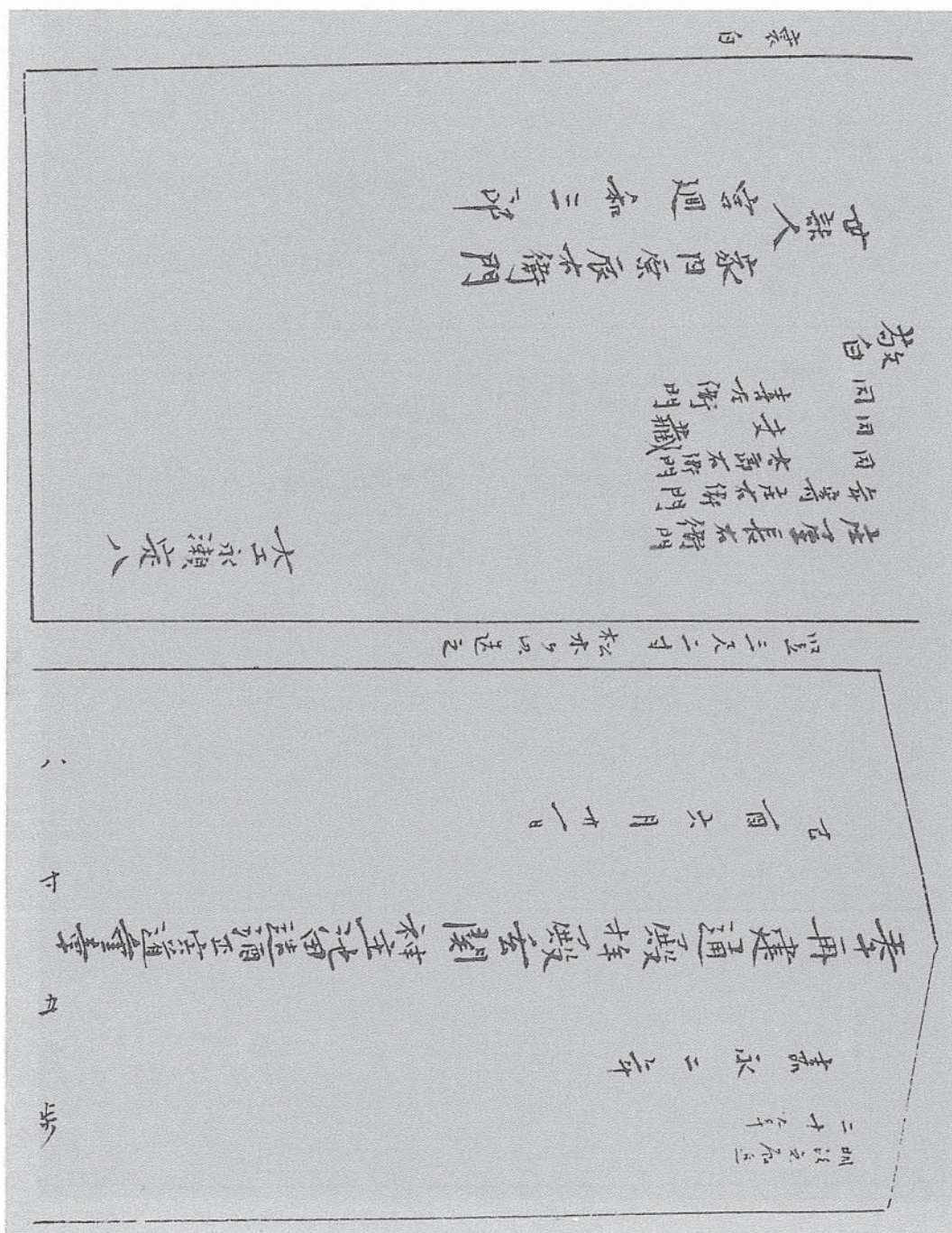
神主池田造酒造安直屋巨敬

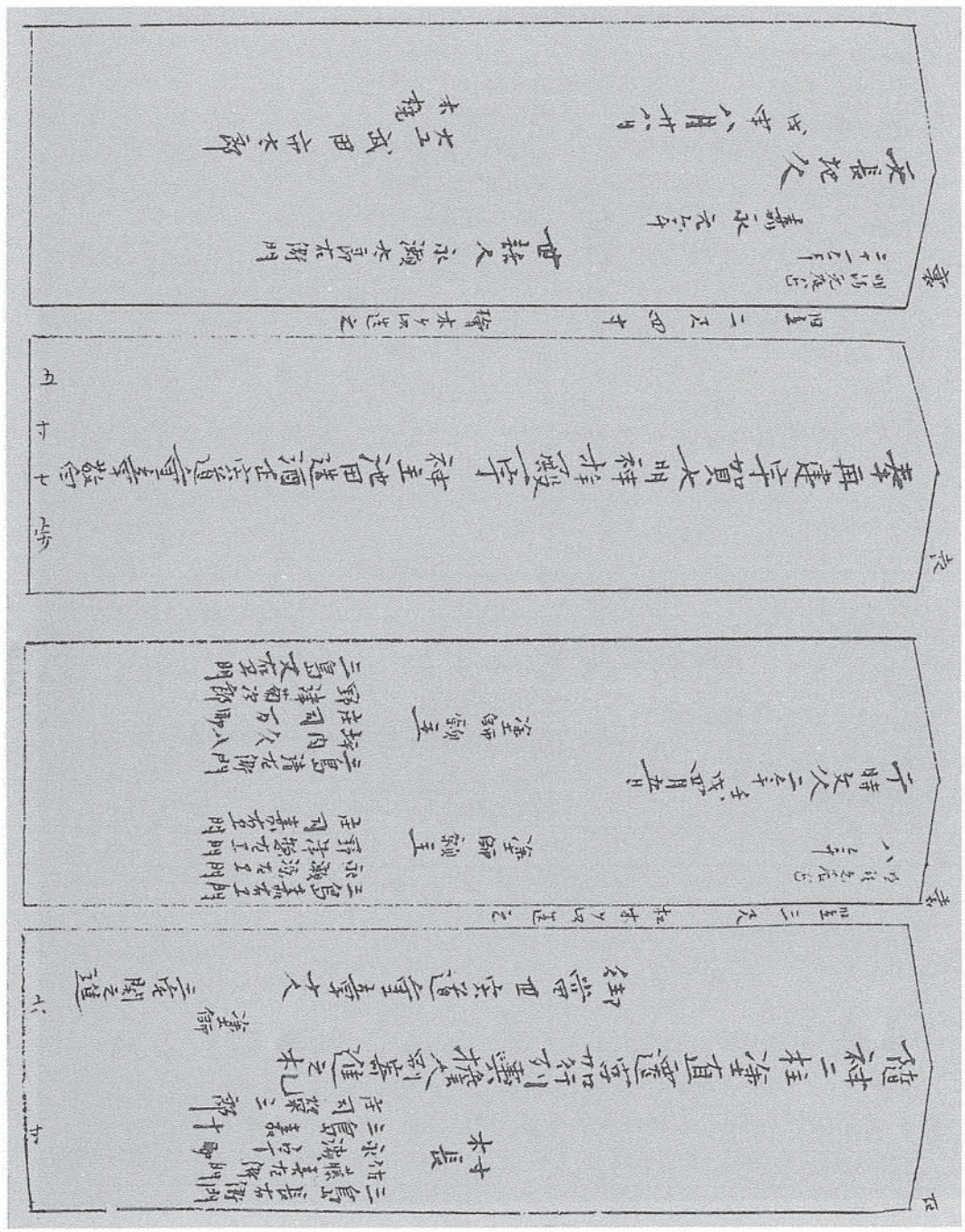
下津船楫仁宮柱大敷五

庄屋 仁宮柱大敷五 庄屋 仁宮柱大敷五

本願 江隆 亦助 同作善石工門 蓮香翁







<p>表</p> <p>首向天祭仁</p> <p>奉年造營妙見神社一宇</p> <p>神主池田雄室齋高次</p> <p>千本高知互</p> <p>六</p>	<p>表</p> <p>明長之辰也本領、高橋以部高朝 庄屋松尾春傑明</p> <p>百一十年同 高橋善花室明</p> <p>同 水雲環仁兵衛 永瀨冬脚</p> <p>同 江膳長形七 籠橋春清</p> <p>同 永瀨冬取</p> <p>同 永瀨冬取</p> <p>二時野野上 正載九月廿六 毎歲 氏子 守兵衛</p> <p>同 喜四郎 三藏 淡兵衛</p> <p>水吉田清脚</p>	<p>表</p> <p>奉年勸鎮燒火火權現一宇</p> <p>天下希平五穀能成火災消條祈儀</p> <p>八寸 松本ヨ以造之</p> <p>六</p>	<p>表</p> <p>天長托父</p> <p>神主池田上總因次</p> <p>永 永七戌戊午年</p> <p>六月二十日</p>
--	--	---	---

表

天下義平國家安全

地名布村

秦律立

蘇火權現社

社主池田郡宇宮道新教

當國大主御風運長久村繁昌民享皇業延命災消祐祈彼

四五ハ寸五分

板木ヲ以造之

叢

下津磐根仁宮程大敷立

天長地久 宇時天明寺

李領 樺原脚次 三層書聊 大工 伊東 大森 谷中 大工 齋宮 李次 出谷 渡名也

天長地久 下末吉青者 但此處之社者明科待奉社之隣兩殿之也

其天原仁寺本高知豆 御内殿 大寺也 依而大寺年間三人役掛

在四方之社ヲ以建立者之

叢

天下義平國家安全

地名布村

秦律立

蘇火權現社

社主池田郡宇宮道新教

當國大主御風運長久村繁昌民享皇業延命災消祐祈彼

四五ハ寸五分

板木ヲ以造之

叢

平時康政寺

李領 三層書聊 大工 伊東 大森 谷中 大工 齋宮 李次 出谷 渡名也

下津磐根仁宮程大敷立

天長地久 宇時天明寺

李領 樺原脚次 三層書聊 大工 伊東 大森 谷中 大工 齋宮 李次 出谷 渡名也

天長地久 下末吉青者 但此處之社者明科待奉社之隣兩殿之也

其天原仁寺本高知豆 御内殿 大寺也 依而大寺年間三人役掛

在四方之社ヲ以建立者之

天長地久 宇時天明寺

李領 樺原脚次 三層書聊 大工 伊東 大森 谷中 大工 齋宮 李次 出谷 渡名也

天長地久 下末吉青者 但此處之社者明科待奉社之隣兩殿之也

其天原仁寺本高知豆 御内殿 大寺也 依而大寺年間三人役掛

在四方之社ヲ以建立者之

三 丁 七 步

仲睦六兵衛 天明

土司池邊越前守 定父

以 交長亦年乙卯 九月十八日

一番具足殿

四番 亦只

二番 宗重殿

一番 上平田

右座 宗加

六兵衛

六番 大西子

七番 吉會次

十番 本回屋敷

一番 西原

一番 七の寺

右座一番 如何 宗三郎

未様 宗事

明神御前、而御神酒

任 布村因 宗目

松本以迄之

御神樂北定
 元禄十四年辛巳月
 巳歲上月
 午歲下月
 未歲上月
 申歲下月
 酉歲上月
 戌歲下月
 亥歲上月
 子歲下月
 丑歲上月
 寅歲下月
 卯歲上月
 辰歲下月

<p>表 龍云乃加意字郡 神主池田進直久 奉年建立金目地羅石玉殿 寺願 永瀨 大即 佐々布村 一丈九寸 松本より送之</p>	<p>表 二時寶曆八年四月廿四日 注屋松資夫右衛門 永瀨 大即 年高 三倉平 高 本堂中甚古衛門 高橋考右衛門</p>	<p>表 吐 香 加 身 奉朝首高橋新並殿 奉年再建之重石羅木替現石屋殿穿 神主池田石見守 依美 父 女 村中當化以 石玉築造所 石屋 世話頭取高橋 一丈一尺八寸 松本より送之</p>	<p>表 六月十日 天長地久 每寄 注屋 小笠澤角兵衛 高橋儀兵衛高橋 注司雲空門 永瀨 大即 坪内利兵衛 三嶋 儀 藏 學字字藏三郎 右衛門 榊原 大即 江藤</p>
--	---	---	---

明和元卷正
八十五号

于時天明四年

神主池田上総

周父

安永九年

願主池田布村

子、細米ヲ以寄進

敬

奉獻吉布郷大森大明神廣前力相之御神事科

甲辰三月吉日

米高懸

格表

子、細米ヲ以寄進

々

安永九年

願主先道所米善儀

長 四三 三尺三寸 松木ヲ以進之

米志斗五俵

三島與八

茶志斗

香常各安衛

同志斗

永瀬新茶衛

同志斗五俵

三島在階

同志斗

三島甚六

同志斗

永常源十

同志斗五俵

江藤甚七

同志斗

在司四郎甚助

同志斗

高橋文十

同志斗五俵

永瀬甚安衛

同志斗

三島甚助

同志斗

高島甚七

同志斗五俵

望眼甚藏

同志斗

多根甚安衛

同志斗

三島甚七

同志斗五俵

江藤甚助

同志斗

野津和三郎

同志斗

野津甚四郎

本願庄屋先道所

水播五左衛門取次

米善儀

兼米山善衛

本權印兵衛

安永九年

同志斗

望澤甚郎

兼山善十郎

願主白石村米善儀
宣尊作衛門世孫
世孫

同志斗

本權五左衛門

子、細米ヲ以寄進

同志斗

望澤甚郎

<p>表</p> <p>表子 勸 諸 證 文 畫 比 離 大 權 現</p> <p>神 主 信 高 出 西 屋 尾</p> <p>四 〇 八</p>	<p>表</p> <p>明 治 之 辰 念 百 七 十 年</p> <p>堅 一 尺 一 寸 六 分</p> <p>松 木 ヲ 以 造 之</p> <p>本 願 高 橋 松 次 郎</p> <p>座 在 是 六</p> <p>年 美 治 有 五 明</p> <p>同 高 有 出 門</p> <p>同 甚 有 出 門</p> <p>同 多 耶</p>	<p>表</p> <p>神 祇 永 昌 護 宮 安 德 本 宮 阿 當 寺 宇 通 達 雄 築 刺</p> <p>表 子 再 建 志 峰 神 社 宇 乘 拜 殿</p> <p>本 願 高 橋 運 兵 衛</p> <p>大 致 廣 布</p> <p>白 〇 〇 〇 〇</p>	<p>表</p> <p>堅 花 大 九 寸 九 分</p> <p>松 木 ヲ 以 造 之</p> <p>明 治 十 五 年</p> <p>天 長 地 久</p> <p>戶 長 野 津 長 一 郎</p> <p>千 五 百 〇 六 日</p>
--	---	---	--

志
 一 聖二丈七寸二分、本木ヨ以造之
 參 嶋二部 本明 (後部)
 永 常仁 衛門 (五尾)
 野 津惣右 王明 (四里) 地下中十二乃 氏子
 田 中 久 有 衛門 注 同 八 部 兵 衛 (中尾) (中尾市之上一ノ無名道徳及云無名(老手書也))
 注 同 五 部 兵 衛 (中尾)

一 神主池田氏采女正産勝
 明 表年造五ノ播宮一守
 大工木村小宮浪市部衛門

表

明治元辰出
百七十八丁

元禄六 雨 八月吉日

宗別喜字郡佐布村

明治五年二箇出三郎了外其安徳三村山出有二十丁上本籍八丁産田米廿
 種職了其從職又表已辭三泥當附受相社之古紙以每二作一和山匠有(世)
 然(熊野村)地已職出三郎未待本津命寺其乃三種社境內又取類倫官
 前例(惟信)又由三母領也之口頼之而書入上書圖都下丁云々
 三谷三郎自歌中故三妻津神社(地已同文(以下略))

(世傳時同義卷)

三信而 五郎三郎
 三倉則 儀三郎
 本常帶 仁左工門
 野津 延左工門
 少吉 彈 善 藏

表

徑三尺六寸八分 根木多以送之

不津鯉者 根在宮柱木數至互

表子修西復密陽志早郡依春鄉八階度一字

高天乃原在千木高知互

社司池田友意出嚙啞宅父

屋三嶋甚六

本堂德者間門

本與本堂德者間門 十二氏子

首與野津彌者間門

枚宗亦與者間門

松江大工梅田平六

下段入庄司德者間門

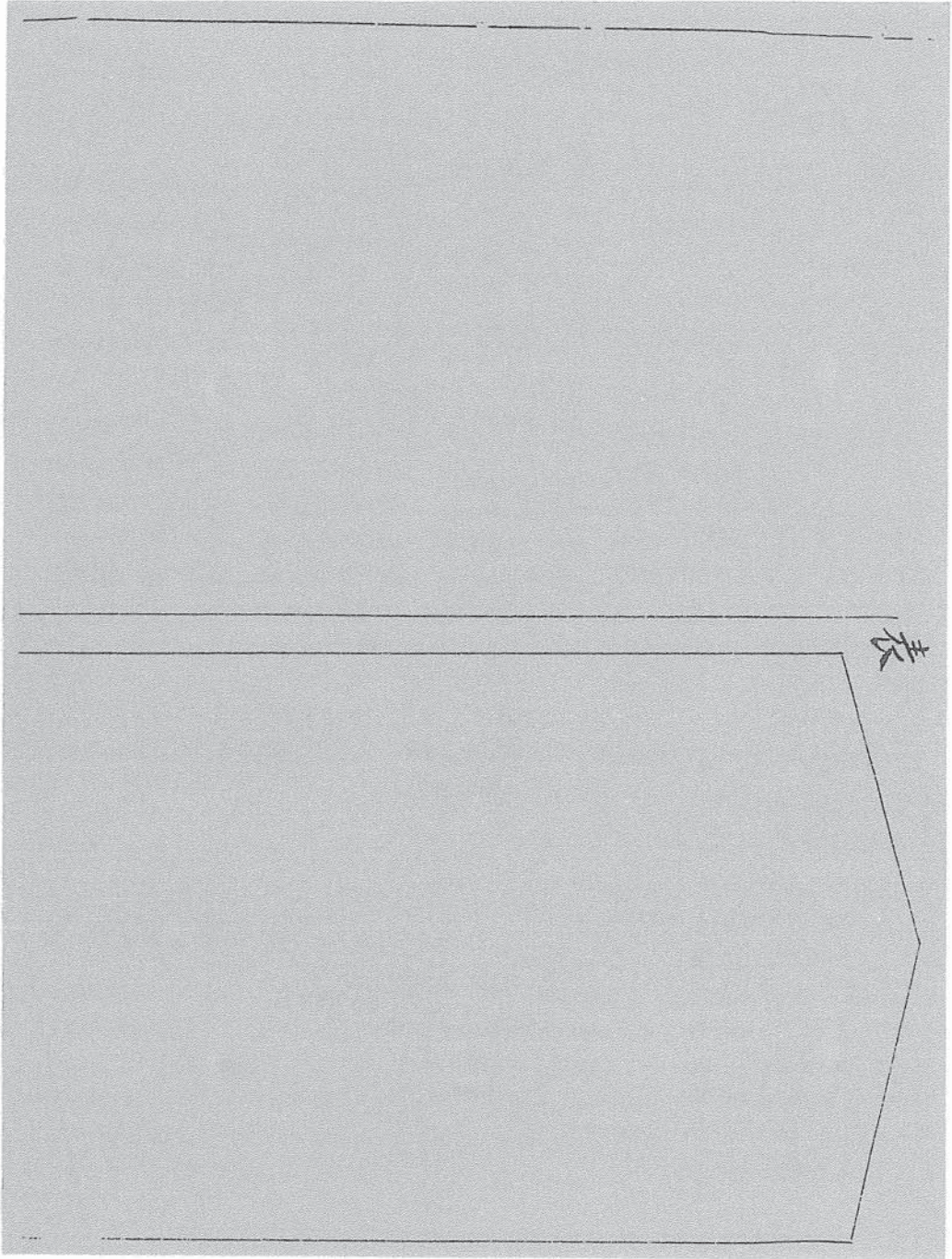
44丁才

壹

天長地及
社頽安康

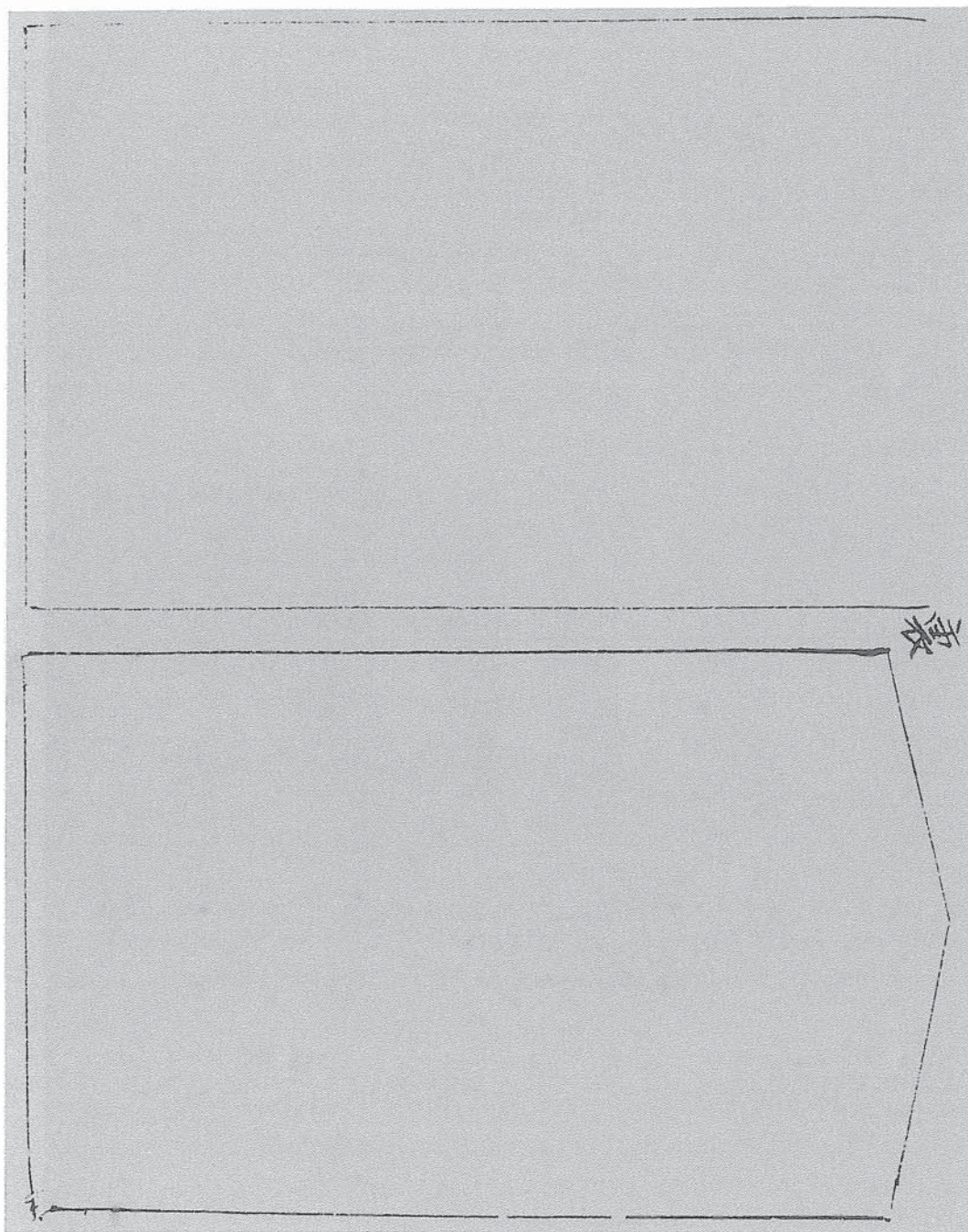
州之政道
百三十四年

百三十四年卯二月二十日



48T9

表



49丁

同當年宗道奉權

承宣持田在衛門勘定手中

頭
持田源次郎
持田覺五郎

表

里二天加叶立歩 松林より生之

記元二千五百四十二年

六

宗上尊仁天皇

遷宗尊仁天皇

表年修 聖德太子郡甲斐村五
正字成後也 見在云云
伊甚神五
武内 伊甚神五

六

表

明治十二年

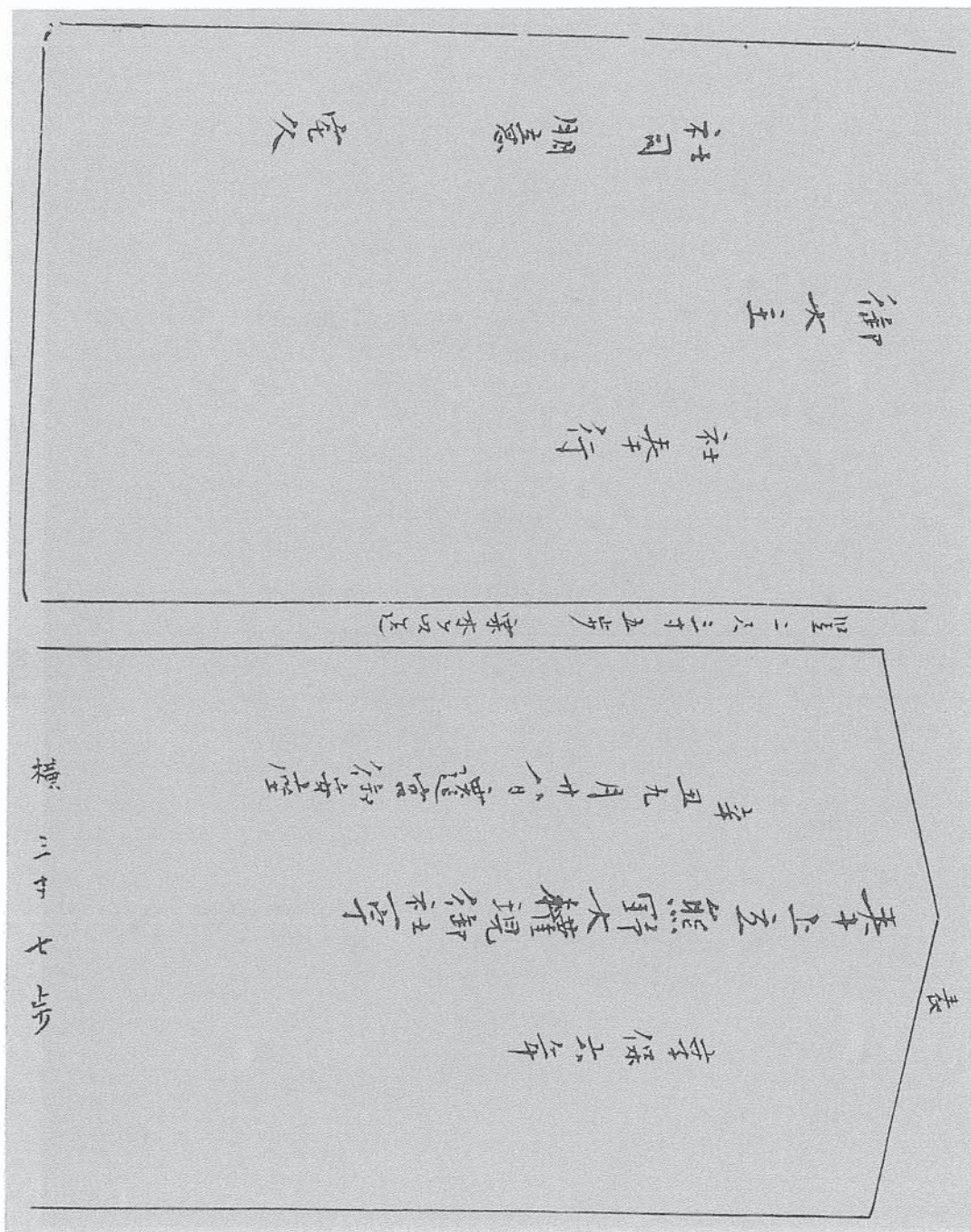
天長地久

郡長渡邊 君長 謹啓

(新津 報告)

癸亥 辰
辰四月卅日

長部 郡長 藤原 貞 敬
大工 原 佐 五郎
樽 皮 里 藤 深 六

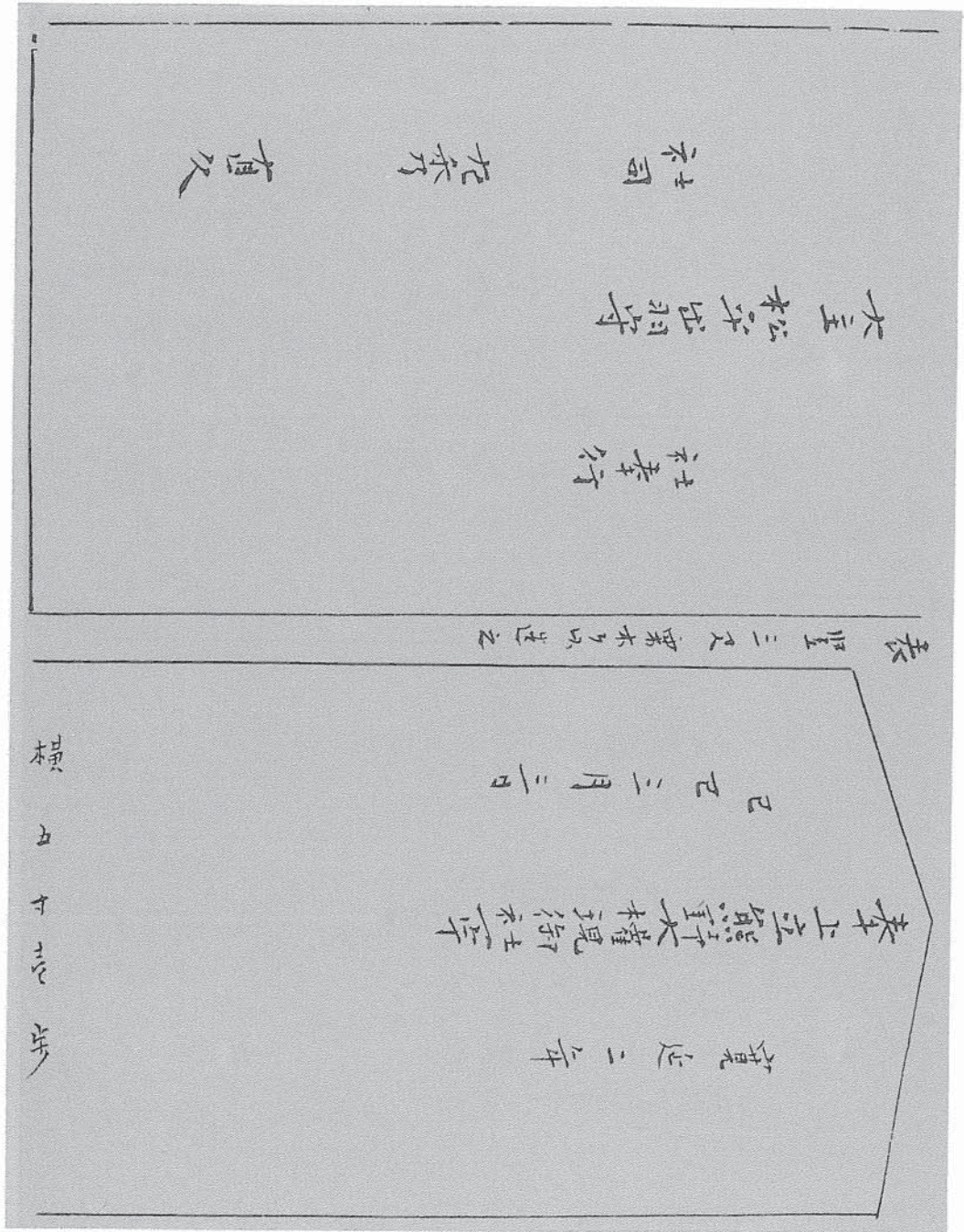


表

三嶋七郎在衛門
 持田藤兵衛
 沈藤三郎
 同權兵衛
 佐司長三郎
 江藤亦在衛門
 望波德兵衛

左藤次在衛門
 宮廻與在衛門
 同五兵衛
 同七兵衛
 同權兵衛
 同利兵衛

雲川嘉安郡小佐布村并三嶋伊衛門
 本領三嶋安兵衛
 安高宮廻涼在衛門
 庄屋三嶋三郎在衛門
 大工持築山松傳兵衛



裏

特田新六
 三官七郎衛門
 内藤徳兵衛
 宮廻重兵衛
 同名七兵衛
 同名權衛門
 同名次兵衛

左様次衛門
 左様五郎兵衛
 同名淺衛門
 江藤中松
 宮廻松
 庄司惣兵衛
 庄司長延兵衛

正遣字

室川重定 御代 村木

注屋三鳴爾衛門
 藏壽三嶋安衛門
 本領三嶋與八
 宋三嶋伊衛門
 宋宮廻嘉衛門
 并持田孫兵衛
 大工先達待野圓七

表

昭和二十二年

<p>下津 船本 仁宮 大敷 五</p>	<p>表 進 意 守 郡 佐 布 部 船 野 社 守 國 君 松 平</p> <p>高 天 乃 宗 千 木 高 知 五</p>	<p>學 頭</p> <p>遠 治 安 佐 志 藤 左 門 藤 宗 善 利</p> <p>名 伏 大 持 三 保 子 知 久</p> <p>全 村 九 次 夫</p> <p>出 羽 守 原 治 郎 公 社 奉 行 神 主 池 田 上 總 宗 道 周 久</p> <p>伊 東 園 衛</p> <p>大 工 堂 村 吉 田 彦 六</p>
----------------------	---	--

表

持田伊左衛門
三嶋文三郎
三嶋水部兵衛
内藤徳兵衛
宮迫甚兵衛
宮迫利右衛門
宮迫權左衛門

宮迫茂助
依藤喜四郎
依藤五郎兵衛
依藤清右衛門
江藤亦左衛門
庄司多吉
庄司三郎

天長地久普安永三守年數九月晦

在司本學在丑部
子為本當也即

本領三嶋與八

同 三嶋和七

同 宮廻源六

同 持田藤兵衛

<p>表 三尺四寸 松木以造之</p>	
<p>下津磐根 仁宮柱 大敷立</p>	<p>六</p>
<p>奉修磐根 壹字郡伏 有磐根神社 壹字國是 松平忠羽守源</p>	<p>六</p>
<p>直四尺 乃 宗仁 千本 高知豆</p>	<p>六</p>
<p>治郷公御遷長久 神主池田満徳 兵部進部 敬謹白</p>	<p>六</p>
<p>後 關右 具守 亦 亦 各 一 日</p>	<p>六</p>
<p>御致遷藤河内縣宗藏陸</p>	<p>六</p>
<p>代出 御社主 宣部 敬</p>	<p>六</p>

表

水鏡本字重載	侍西 伊花 陽門 三嶋 多多 三嶋 蓬次 内 咲 權 大 内 咲 松 宮 廻 重 兵 衛 明 宮 廻 友 在 陽 明 宮 廻 五 郎 宮 廻 涼 太 衛 門 宮 廻 繁 次 郎 依 藤 武 左 衛 門 依 藤 隆 五 郎 依 藤 隆 五 郎 注 司 長 藏
十二文字	依 藤 本 太 衛 門 注 司 本 堂 與 兵 衛 門
大工 梁瀬 多 重 藏	同 三 嶋 和 七 同 宮 廻 涼 重 同 持 田 兵 衛 門 大 工 梁 瀬 多 重 藏
生 蓮 在 室 小 豆 澤 吉 郎 兵 衛 門 三 嶋 三 嶋 文 次	長 地 次 于 時 享 和 元 年 辛 酉 九 月 廿 日 本 領 三 嶋 宇 左 衛 門

道

依布茶標明神社御祭禮高柳燈塔馬弄跡

兩内茶倉儀清亡文部省舊儀改古嘉進外神領公承一因

完儀相法部公儀之八如和二成月午上烟山標表

字高松山外神屋公之屋山喜慶儀殿持古文字

古宅神領同立表出終有上烟山内公有次屋補

仕發望三付見古下田志標出高松斗里中零合流松松

出者地本上谷相談者改置地在田高神領

備置心打七右地利未年之七清古文治景達一後七

以以神領一取不在神領字儀應法取寄進物性會

當置每國之進地松西一在社者後祀仍如

神主 池田 進登

三鳥直助

替地部替一刺地則
空室所恭寄直登

法屋三馬三郎



明治五戊子十一月

實田權右衛門殿

竹
上
箱
高
十二
六
分

箱高十二分
六分

分米以俵二原并雨納

明和三年戊二月

右大米林明和

右之烟明和五子十一月大米林並次之元通替地成

見上分出也上内

下田志敵步

分米壹斗四分

上高壹斗四分四分

船成一斗二升二合九分
壹升壹分九分

然十二

前敵前敵步

此榊米二斗四分 外二合四分四分

原年二斗六升九分

壹斗三升一合一分

注
六

五三
五三
五三
部
少
次

前敵十二

上川高二斗五升九分二分

船成一斗四分一合九分二分

5777

小依各布

熊野神社遷宮式 明治十八年
 乙酉四月十日
 外遷宮成行列棟札順之次第
 湯行 六道一子雄
 渡座 六道一子雄
 奏樂

本工次反

明治五年十二月

与甚部 志部

九件 田
 三斗六件 四畝步
 三斗六件 三斗六斗運賃
 三斗六件 三斗六斗
 三斗六件 三斗六斗
 差引三斗二件 二斗六斗
 大之畑十斗五斗三斗三斗三斗三斗
 高畑場一斗五斗三斗三斗三斗三斗
 亦有然其未丑年夏諸後目亦至近其亦
 已社和靈地知六斗五斗中斗五斗五斗
 後日替地聖定後四斗

淨目

湯棚供物

現禾志恩

粟志恩

餅一重 神酒二懸集二重

神前

鹽水行事

餅一重 神酒二

海梁二籠 甘辛西菜二重

以上五重

正遷宮

遷宮後殿築久和田

乙酉九月十日、夜味祈三遷宮

神有同遷奉年報言并世所掛同告

湯行

古瀬 柔乃年代

清目

遷座 虫道峰清

奏樂

共供 卒園園箱

行列

表導遊

沈 膝善市

遊學

社 村 橋 賀 假 冬 門

月

自 名 村 森 山 重 之 山

同

宮 廻 柳 大 郎

同

沈 倉 岩 市

室 熊 古 部

幣 帛

如 堂 燈 佐 春 郎
去 海 船 在 留 新 春 郎
神 心 自 根 淺 高 郎

宮 廻 源 左 清 郎

三 留 文 春 郎

神 宿 前 後 奉 饗

真 棟 二 基 二 宿 善 二 部

三 鳥 秋 藏

女 色 宿 論 編 二 天 女 身 二 部

四 神 鉞 二 韻 枕 十 膳 准 聖 明

三 鳥 六 水 部

四 神 鉞 四 三 基 凡 張 義 明 二

本 何 七 庚 絛 統 夕 四 宿 二 三 九 十 所 多 四 又

御 膳 四 宿 廻 福 藏 宿 廻 常 考 部

三 息 符 脚 持 田 兼 三 部

神 宿

遷 宿 系 二 宿 登 冬 部 宿 廻 脚

持 四 重 脚

宿 進 條

三 息 六 水 部

宿 廻 血 部

翠 木

供 物 六 基 五

神 宿 甘 辛 神 餅 海 菓 鳥 海 菜 呼 菜

入 品 服

本 錦 足 柄 欲 十 技 筋 子 二 廿 字 二 樽 二

懸 劍 木 委 大 室 小 室 業 以 上 一 墨 苑

熊野神社遷宮証書
 熊野神社 御供物
 廿七日
 午前湯行式 次有供備 次祓禊
 廿六日 在親殿
 廿五日 祈願表飾 懸魚 物各三箇 益本御連行
 明治十九年四月廿七日 以執行
 熊野神社遷宮証書
 湯行棚一或 留置付 釜一個
 熊本御 左及 右 共 六 本
 社用久丈 三 人
 熊野神社 御供物
 廿四日

寸 七 又 吉 横

御卯

八月廿辰日辰

是也 小豆澤 兵衛 三 次
見上 庄 司 善 吉
見上 伊藤 林 久
見上 小豆澤 善 藏

神主池田邦守住加子邦茂

隨神御尊像 高麗廣太基

奉獻

下田 永瀨 兵衛 吉
見上 永瀨 吉 兵衛
見上 津 要 右 衛 門
見上 野 守 吉
見上 三鳥 彌 右 衛 門
見上 三鳥 庄 右 衛 門
見上 三鳥 文 次

寛政七年

聖吉 又 隨 神 甚 堂

細工 去 都大佛師 國中藏之至

御尊 敬起 野津 重吉

一切御尊 敬起 此重吉 世語 以御出來 御下 相或倭也

一銀拾七分

文次 小信和木家

一兩拾七分

廣衛門 江麗

一兩拾七分

彌衛門 上海邊

一兩拾七分

善藏 以心志

一兩拾七分

善兵衛 意字

一兩拾七分

兵吉 下團

一兩拾七分

林次 烟上

一兩拾七分

利兵衛 安土

一兩拾七分

善兵衛 舞臺中

一兩拾七分

善吉 兼有

一兩拾七分

豐衛門 加茂 空屋出志

一兩拾七分

十右衛門 代屋 五代吉田

一兩拾七分

與三次 伴志具 拾

一兩拾七分

御尊 像 御兩膝 駒次共

料銀 貳百三拾八分也

但之宗 下 駒 眞其也 是 相 取 不 俵 故 千 直 付

明治二十五年戊子五月八日西曆三月廿六日

本郷山崎日輪坂八幡宮正遷宮行列

一 遠道寺幣

庄司吉兵衛
奉燈 下無舞
庄司榮左門

奉燈 三嶋孫市

一 他所氏子行列各員

箱灯燈 本常捨四郎

箱灯燈 永瀬傳太郎

青多根庄次郎

赤庄司虎市

一 武内神社講負色幣

白 本常寺三郎

黒 庄司虎太郎

黄 庄司久三郎

御指旗

庄司吉兵衛
庄司傳市

武内宿祢神輿

噴付

六員 庄司利一郎
庄司茂太郎
三嶋重次郎
庄司榮太郎

五色

青野津瀧次郎
黄渡邊政市
白永瀬喜市

御旗

赤永瀬久太郎
黒庄司虎市

千氏子

庄司善八
本常長之助
依藤為太郎
野津愛藏
依藤善市
依藤甚右門

武内神社代石殿上
明治二十三年三月三日木神
上條一辨降臨重是夕
神休トシテ講員ヲ組立
社廟新築ス

寄附
三嶋元太郎
庄司幸一郎
多根康之助
三嶋市太郎

庄司竹次郎 渡邊留翼郎 庄司利市 永瀬傳郎
左白東 三嶋重次郎 御徳利二 多根茂一郎 庄司福次郎
 永瀬常太郎 藤原泰郎 三嶋孫市 本寺持西郎
後白東 庄司慶太郎 御徳利二 三嶋儀一郎

庄司安郎 庄司謙太郎 藤原勝藏 渡邊基次郎
上野下下石橋 城子 寺前御中 矢下 奥下
 小本政守 庄司益藏 野津常市 永瀬捨之助
兩多小島 寺前御中 矢下 奥下

本寺宇三郎 庄司久三郎 野津瀧次郎
下野下 奥下 野津瀧次郎 野津久次郎 野津喜次郎
 依藤利重門 庄司庄太郎
炭上 向 中組 多根庄次郎

三島重次郎 御幕松原龜市 御鏡 野津經太郎
松原代 仲太郎 鏡 野津經太郎

三嶋重次郎 三嶋重次郎 三嶋重次郎
三嶋重次郎 三嶋重次郎 三嶋重次郎
 御額 庄司傳市 庄司傳市 奉燈 清目神官
三嶋重次郎 庄司傳市 庄司傳市 奉燈 清目神官

四神鈴 庄司慶太郎 御徳利二 三嶋儀一郎
右白東 三嶋重次郎 御徳利二 庄司福次郎
 庄司松太郎 朱定辨 永瀬笑太郎
後白東 庄司松太郎 朱定辨 永瀬笑太郎

玉鈴 野津久兵衛 御徳利二 三嶋元太郎
善次郎 野津久兵衛 御徳利二 三嶋元太郎
 打鳴 野津次郎 御徳利二 野津耕吉
樹立 多根喜兵衛 樹立 多根喜兵衛

御鏡 本常仁衛門 御掛盤 庄司虎一郎
御鏡 本常仁衛門 御掛盤 庄司虎一郎
 朱三方 永瀬為三郎 御戸張 三嶋種美
御鏡 朱三方 永瀬為三郎 御戸張 三嶋種美

本寺三嶋重次郎 錦蓋 永瀬泰郎 御五事 三嶋種美
本寺三嶋重次郎 錦蓋 永瀬泰郎 御五事 三嶋種美
 几張 永瀬為郎

65丁ウ

真榊 庄司傳寺 差羽 野津敏太郎

真榊 三嶋愛治郎 差羽 秋宗隆一郎

神官 古瀬 秀千代 從者

66丁キ

遷宮司 齋主 穴道 峰清 從者二人

供櫃 二人 村吏 信徒惣代人

神幣 神官 今岡 関雄 從者一人

野津 冬登 中 三嶋 冬郎 下海邊 海部 庄司 虎郎 山崎 三嶋 隆郎 根 根 茂郎

八幡宮 神樂 樂了拾人

野津 春郎 後 野津 哲吾 長谷 本寺 佐郎 土居 根 賴 郎 加藤 高 福 郎 中野生

(明治二十九年 己丑五月七日)

(表 面)

神 祇 永 昌

出雲國 意旨郡

明治今上睦仁天皇 内務大臣伯爵松方正義

葦原三宮

奉 修 西 復

齋 本 宮

實道正宮

大 森 神 社 一 字 神 道 管 長 從 三 位 子 爵 稻 葉 正

實道村 佐々布

大 政 廣 布

從二位勳一等皇典講究所長司法大臣顯義

田 山

66T4

島根縣知事 龜手田安定

元戶長 山豆澤猪一郎

左
庄司 清藏
武田 福太郎

邦

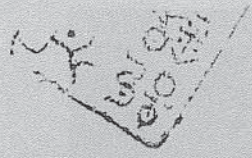
神官 宍道峰清 出雲 煎菜庄

郡長 正八位 大野 義就

組 長

野津 善次郎 大六
 三嶋 益太郎 新六
 久根 善兵衛 新六
 江藤 喜加太郎 新六
 家宗 高之助 新六
 武田 夏太郎 新六
 木挽 本常太郎 新六
 檜皮 伊藤 栄六 新六

百太郎の殿、三不録、高、三、北、不、可、也



三島海太郎
 三島慶太郎
 三島祐太郎
 三島松太郎
 永瀬福之助
 三島隆太郎
 三島陽藏
 三島中太郎
 三島文兵衛
 三島清太郎
 三島光太郎
 三島隆太郎
 三島百太郎
 三島久太郎
 三島仙太郎

三島派太郎
 三島田太郎
 三島定太郎
 三島市太郎
 三島中太郎
 三島愛蔵
 三島延太郎
 三島虎太郎
 三島中太郎
 三島隆太郎
 三島隆太郎
 三島隆太郎
 三島隆太郎
 三島隆太郎
 三島隆太郎

(68丁は白紙：服部 旦)

68丁

本宮大木神社正遷宮他所行列

西来待村 石田久平
 東来待村 中田利太郎
 東谷村 本浦関太郎
 岩倉村 藤原敏五郎
 同所 藤原敏五郎
 松江 錦織留太郎
 宝通所 庄司シマ
 林 永瀬佐之助
 三纏村 戸谷孫市
 伊志見 庄司岩太郎
 西来待 持田彦之市
 上未待 土江藤太郎
 宝通所 狩野富太郎
 狩野茂太郎
 岩倉 小林儀一郎

二
 岩倉村 錦織公次郎
 沖頭 錦織藤太郎
 東来待 伊藤君次郎
 下神原 舟木嘉右衛門
 東来待 土江虎一郎
 西来待 土江柳助
 本宮中組 留太郎
 松江 松江殿
 伊藤久助
 宝通所 江藤成四郎
 西来待 石留榮太郎
 大東 木村フイ
 緋原 飯塚近太郎
 沖ノ瀬 高嶋シニ
 次三

三
 岩倉村 内田ヨモ
 大東下分 山本久米藏
 加茂所 木内太郎
 下庄原 布施豊共藏
 弘長寺 土江廿父
 小栗 平藤夕リ
 仁和寺 山崎壽之助
 金山 福嶋伊平
 岩倉 錦織俊郎
 東谷中山 榎谷伊平
 宝通所 永瀬茂十
 岩倉 小林儀一郎
 久野 原慶七
 佐藤善六郎
 西来待 出川豊次郎

四
 加茂所 野津米次郎
 岩倉 原權太郎
 坂口 焼火組
 宝通所 坪内薰一
 坂口 (組合の所) 本常作四郎
 宝通所 佐藤吉太郎
 宝通所 川田林左衛門

一臨江宗神如安下上柱徑祭祀之佐李氏古姓建
 加安氏者名清也晴辰園藝馬共同時為慶免中
 傳之安原居麻山坡至藝耕江舟先世發福開南水三十
 奇之園出宗不即後集三戶以社錄之長也此地字加安俗
 加安分川加安分輪寺耕社錄之也
 宗道鄉本鄉之土地承銀魚之湖邊之山以成屋也所也
 舊地之真澄神農了此山湖南大橫坡如也
 本會大森林社境外未之云長正改前係社界也

無裕生 賀安社之 御出請 調木自昔
 社堂中道會清園建
 明二十四年十二月六日
 天保十二年
 丁時 一家二庭之各報香兵御
 孫 夜木御
 賀見 安通所
 木挽良御 不工作七

天高原系 國主紀千出明寺慶開貴心
 春建之加安大明神社字
 千木高知王
 神主宮道遠酒清 會年雜知
 (泥田)之 (藤池)之

表

奉造

天福天王

社司池田佐秀直久

(池田より改二)

立

御社堂宇

地福天王

本願同名朋意宅久

裏

元文三年

戊午七月吉日

御座同廿一日

村中般榮榮
守護所

<p>表</p> <p>奉造立着雄宮一宇 社司池田明意次</p>	<p>宸</p> <p>東林社 元文二年丁巳六月日奉領窪内原與三兵衛</p> <p>寺(慶長拾七)</p>	<p>表</p> <p>奉造立着雄宮大明神 神主池田直久 領王來内原與三兵衛</p>	<p>宸</p> <p>寛延三庚午之歲八月十四日</p>
----------------------------------	---	--	------------------------------

（大正拾年乙丑四月十六日）

（表画）

出雲國八束郡

八束郡長松澤龍雄

（「改造」ノ上ニ貼紙
シ「再建」ノ二字）ニ服部旦

奉再建村社大森神社一字島根縣筆別村惣太郎

出雲村佐々布

出雲村長家原重義

7374

士掌

吉瀬秀千代

大

設計者 高木吉之助
棟梁 庄司虎之助
副棟梁 武田權市
副棟梁 藤原捨市
大工 庄司松太郎
伊藤富我
小島源次郎
三島彌助
有田和市
佐藤喜次郎
二條宗文(本口繪記(末二冊録)
文、點紙)下
二條宗文(本口繪記(末二冊録)
文、點紙)下

木換棟梁

藤原捨市 檢皮

木柅

昌子熊市 区長

後引新悦

宮廻掃方

木柅

永瀬捨一 収
宮廻出高
赤島捨次郎
榎野嘉市
小島喜七郎
宮廻希比次
昌子信一 吉
宮廻久比次
後引新悦
昌子信一 吉
赤島捨次郎
宮廻希比次
左田文市
宮廻捨次郎

三宅徳九郎
西田久左郎

江三郎(本口) 区長
宮廻禮左方
永瀬吉比郎
三島喜七郎
伊藤長次郎

〔裏面〕

天長地久

天時大正拾年歲在乙丑

幸

願

慈

代

本幸周太郎
二島覺太郎
三島安三郎
三島安三郎
現合統家

三島兄太郎
如常運市
如常因太郎
家系叔丈
永修為三郎
三島恒四郎
三島夏三郎
永修美晴
十一里信政
三島清太郎
幸國老郎
三島禮太郎
伊原真太郎
三島真太郎
三島真太郎

義金同等以抽籤作列

家原淑支

三島元太郎

家原重義

永瀬義晴

伊司幸一郎

永瀬為三郎

江藤禮

本常國太郎

七五 依政太郎

7574

江藤重時

伊原忠太郎

永瀬兵太郎

三島橋太郎

昌子土五郎

依藤吉藏

伊原忠太郎

本常周吉郎

三島恒四郎

野井知三郎

多根文木君

宮廻桂太郎

伊原重義

永瀬為三郎

三島元太郎

昌子土五郎

依藤吉藏

廣司千代志

庄司茂太郎

三島恒三郎

三島愛三郎

三島恒四郎

永瀬為三郎

三島重吉郎

家原重義

伊司長三郎

庄司周太郎

庄司重太郎

高橋松三郎

高橋岩之郎

依藤信市

佐藤 為三助
 江藤 吉太郎
 藤本 徳吉郎
 家平 康吉郎
 杉本 理太郎
 佐藤 倉三郎
 佐藤 長助
 廣野 慶三郎
 小島 与一郎
 佐藤 周太郎
 橋本 物吉郎
 土江 勝太郎
 小島 喜左郎

有田 卜七
 永徳 友市

藤平 松市
 庄司 謙市

太田 鐵吉郎
 永徳 傳吉郎
 江藤 吉平
 坪倉 倉吉
 伊平 弥吉郎
 野村 政藏
 石原 銀平
 佐藤 寛吉郎
 家平 順藏
 上之腰 金博
 左田 茂平
 野津 康吉郎
 佐藤 与一郎
 杉本 吉三郎
 山根 理市
 本常 清市
 江藤 兵吉
 山根 兵吉
 山根 兵吉
 保科 久四郎

何平 藤三郎
 川島 佐吉郎
 佐藤 清吉
 内藤 政市
 昌子 ノゲ
 好田 榮太郎
 三島 貞市
 伊平 康吉郎
 江藤 清市
 本常 直市
 坪内 仙市
 武田 明

以下20丁白紙。
 奥書、綴り等
 一切無記。20丁
 次ハ裏表紙。
 コレモ一切無記
 ……服部 旦

(補一)

(74丁才貼紙ノ下ノ原

案文・点線ノ代

ト大工カラ下

全部：服部 旦)

士掌 吉瀬秀千代

空

設計者 高木吉之助

棟 梁 庄司虎之助

副棟 梁 武田権市

棟 梁 藤原与市

木 枕 副棟 梁 昌子熊市

檜 皮 三宅徳太郎 武田久太郎

区 順 江藤栄太郎

藏 棟 梁 家原万之助

長 藏 棟 梁 空廻禮太郎

(伊原山左衛門) (服部旦) (左司長次郎) 三永 藤原与市 藤原与市 藤原与市

